

跡府国後筑

(II)

久留米市文化財調査報告書

第 13 集

1 9 7 7

久留米市教育委員会

跡府国後筑

II

序

筑後国府跡推定域内における埋蔵文化財の発掘調査は、5年目に入りましたが、域内の住宅建築は増える一方で、その対策に苦慮しております。このような状況のなかで、第2冊目を公刊することになりました。この報告書は、久留米市立合川小学校の施設拡充にともなう工事によって、事前に実施した緊急発掘調査の報告書であります。何分にも多忙な毎日のなかで刊行した報告書でありますので、満足できるものではありませんが、全国の国府研究やそのほかの研究に、本報告書を一資料として活用いただければ幸甚であります。

発行にあたり、種々の協力をいただいた関係各位に深い感謝の意を表します。

昭和52年3月31日

久留米市教育委員会

教育長 安 元 忠 男

例 言

1. 本書は、久留米市教育委員会が国・県の補助を受けて昭和50～51年度に実施した合川小学校々舎増築にともなう、筑後国府跡の緊急調査の報告書である。

2. 本書の執筆分担は次のとおりである。

第1	櫻 井 康 治
第2-1	櫻 井 康 治
2	櫻 井 康 治
3	萩 原 裕 房
4	古 賀 壽
	近 澤 康 治
第3	古 賀 壽

3. 掲載の図版は、古賀、櫻井、萩原が撮影したものである。実測図の作成は挿図目次に示すとおりである。

4. 本書の編集は萩原が担当した。

5. 本書の遺構標示は、下記の略記号による。

SA-柵	SB-建物	SD-溝	SK-土壇
SX-その他			

本文目次

第1 はじめに.....	1
第2 調査の概要.....	4
1. 第1次調査.....	4
2. 第2次調査.....	5
3. 第3次調査.....	28
4. 第4次調査.....	45
第3 おわりに.....	55

図版目次

本文対照頁

図版 1	(1) 第2次調査区全景（東より）	5
	(2) 土壇SK3遺物出土状態	13
2	溝SD1出土遺物	5
3	竪穴式住居跡出土遺物	9
4	土壇SK3出土遺物①	13
5	土壇SK3出土遺物②	15
6	土壇SK3出土遺物③	15
7	土壇SK3出土遺物④	18
8	(1) 土壇SK3・4・7出土遺物	21
	(2) 第3次調査区全景（北より）	28
9	(1) 第3次調査区全景（東より）	28
	(2) 溝状遺構SD1（西より）	28
10	(1) 溝状遺構SD4（西より）	29
	(2) 溝状遺構SD4遺物出土状態	29
11	溝SD1出土遺物①	30
12	溝SD1出土遺物②	31
13	溝SD4出土遺物①	34
14	溝SD4出土遺物②	35
15	(1) 第4次調査区全景（南より）	45
	(2) "（北より）	45
16	(1) 第4次調査区全景（西より）	45
	(2) 西北隅柱穴群	48
17	遺構中の遺物出土状態	48
18	(1) 根石を有する柱穴	48
	(2) 出土遺物	49

挿 図 目 次

	頁
第1図	筑後国府跡調査地点・条坊推定図（櫻井製図・作成）……………折込み
第2図	御蔵園遺跡発掘調査区（櫻井製図・作成）……………3
第3図	第1次調査断面実測図（樋口一成・松田直也実測、櫻井製図）……………4
第4図	第2次調査遺構配置図（松田・櫻井・近澤実測、櫻井製図）……………折込み
第5図	S D 1 第Ⅰ層出土遺物実測図（櫻井実測・製図）……………6
第6図	S D 1 第Ⅰ層出土遺物実測図（萩原実測、藤田製図）……………7
第7図	S D 1 第Ⅲ層出土遺物実測図（櫻井実測、藤田美佐子製図）……………8
第8図	S B 2・5・7 出土遺物実測図（鹿子島愛里実測、松村一良製図）……………10
第9図	S B 8 出土遺物実測図（櫻井実測、松村製図）……………11
第10図	S K 3 出土遺物実測図①（櫻井・鹿子島実測、松村製図）……………12
第11図	S K 3 出土遺物拓影（鹿子島実測・手拓、松村製図）……………14
第12図	S K 3 出土遺物実測図②（櫻井・鹿子島実測、松村製図）……………16
第13図	S K 3 出土遺物実測図③（櫻井・鹿子島実測、松村製図）……………17
第14図	S K 3 出土遺物実測図④（櫻井・鹿子島実測、松村製図）……………18
第15図	S K 3 出土遺物実測図⑤（櫻井・鹿子島実測、松村製図）……………19
第16図	S K 3 出土遺物実測図⑥（櫻井・鹿子島実測、松村製図）……………20
第17図	S K 4 出土遺物実測図（櫻井・鹿子島実測、松村製図）……………22
第18図	S K 7 出土遺物実測図（櫻井・鹿子島実測、松村製図）……………23
第19図	G-02 出土遺物実測図（櫻井・鹿子島実測、松村製図）……………25
第20図	S D 2 出土遺物実測図（萩原実測・製図）……………28
第21図	第3次調査遺構配置図（萩原実測・製図）……………折込み
第22図	S D 4 土層断面実測図（萩原実測・製図）……………29
第23図	S D 1 出土遺物実測図①（萩原実測・製図）……………32
第24図	S D 1 出土遺物実測図②（萩原実測・製図）……………32
第25図	S D 1 出土遺物実測図③（萩原実測・製図）……………33
第26図	S D 4 出土遺物実測図①（萩原実測・製図）……………36
第27図	S D 4 出土遺物実測図②（萩原実測・製図）……………37
第28図	S D 4 出土遺物実測図③（萩原実測・製図）……………39
第29図	S D 4 出土遺物実測図④（萩原実測・製図）……………40
第30図	S D 4 出土遺物実測図⑤（萩原実測・製図）……………42

第31図	S D 4 出土遺物実測図⑥（萩原実測・製図）	43
第32図	第2次・第3次調査遺構配置図（櫻井・松田・萩原・近澤実測、萩原製図）	折込み
第33図	第4次調査遺構配置図（古賀・大石昇・近澤実測、近澤製図）	折込み
第34図	S K 10・11遺構実測図（近澤実測・製図）	46
第35図	S K 12・13遺構実測図（近澤実測・製図）	47
第36図	掘立柱建物址断面図（近澤実測・製図）	48
第37図	掘立柱建物址遺構配置図（古賀・大石・近澤実測、近澤製図）	折込み
第38図	出土遺物実測図①（古賀・近澤実測、近澤製図）	50
第39図	出土遺物実測図②（古賀・近澤実測、近澤製図）	51
第40図	出土遺物実測図③（古賀・近澤実測、近澤製図）	52
第41図	出土遺物拓影（近澤手拓、製図）	52

表 目 次

第1表	筑後国府城内御蔵園遺跡調査一覧表	2
第2表	筑後地方緑釉陶器出土地名表	54

第1 は じ め に

御蔵園遺跡は、久留米市合川町字御蔵園 505 番地に所在している。本遺跡は、耳納連山の西端高良山（標高 312 m）より派生する低位段丘の北東縁辺に位置し、筑後川の氾濫原と比高約 3～4 m を呈している。また、筑後国衙跡と推定されている阿弥陀遺跡の北東約 500 m の位置にある。

御蔵園遺跡の発掘調査は、筑後国府域内であることと、さらに校庭内より奈良～平安期の遺物の出土が報告されていることから、久留米市立合川小学校の校庭整備並びに校舎建築に先がけて、4 次に渡り緊急に発掘調査を行なったものである。

筑後国府跡の調査組織は下記のとおりである。

調査主体	久留米市教育委員会	教育長	吉 武 不二男	(前任)
			安 元 忠 男	
		文化担当主幹	半 田 豊	(前任)
			大 石 繁	
		係長	塚 本 直 次	
			堤 諭 吉	
調査担当者			古 賀 壽	(第1・4次)
			萩 原 裕 房	(第3次)
			櫻 井 康 治	(第1・2次)
			中 尾 徹	(第2次)

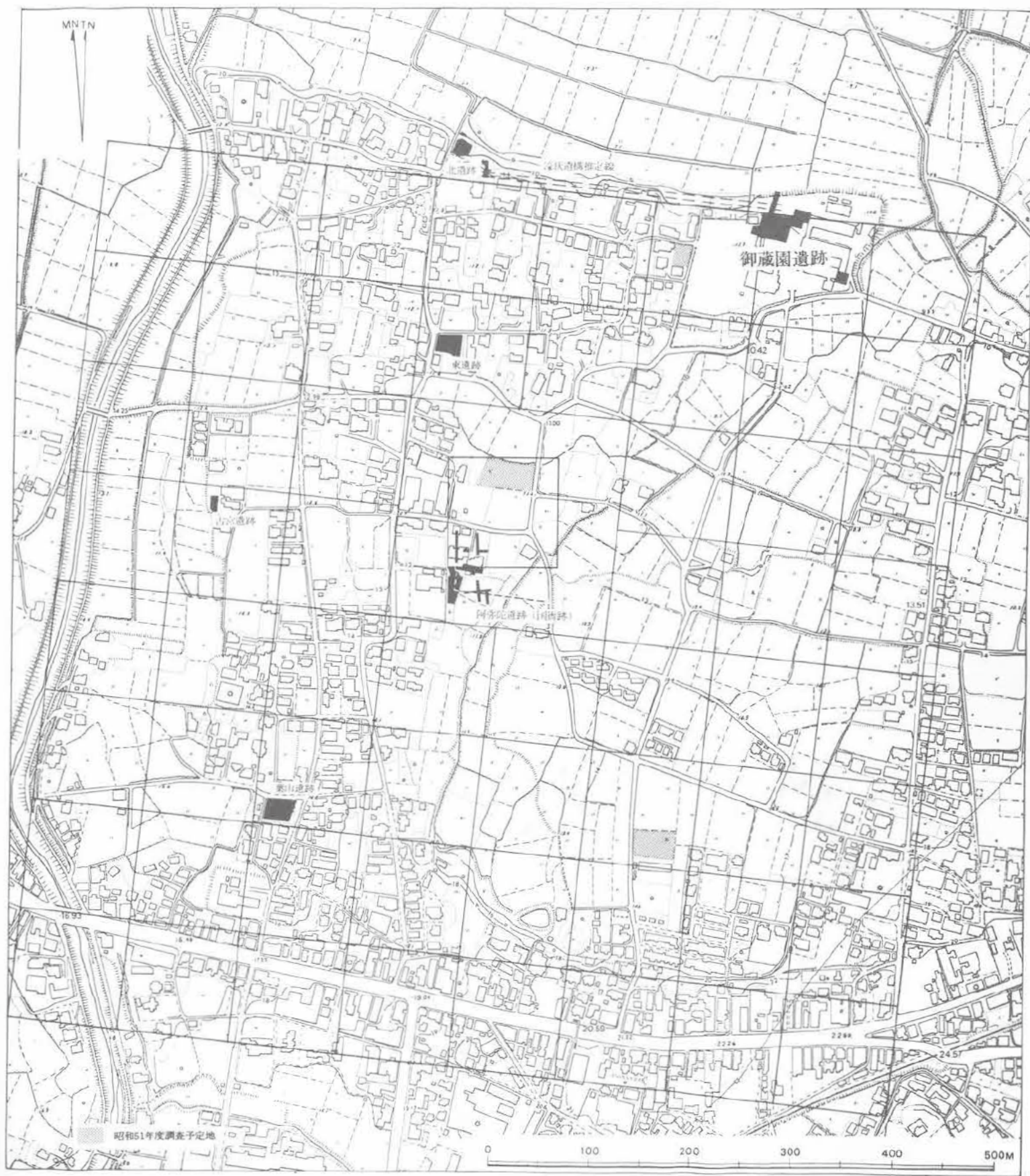
筑後国府跡発掘調査指導委員会

委員	鏡 山 猛	九州歴史資料館々長
	波多野 皖 三	梅光女学院短期大学教授
	小 田 富士雄	北九州歴史博物館主幹
	鶴 久 嗣 郎	県立福島高校教諭
	佐 田 茂	福岡教育大学講師
	山 本 輝 雄	九州大学工学部助手
		合川公民館々長

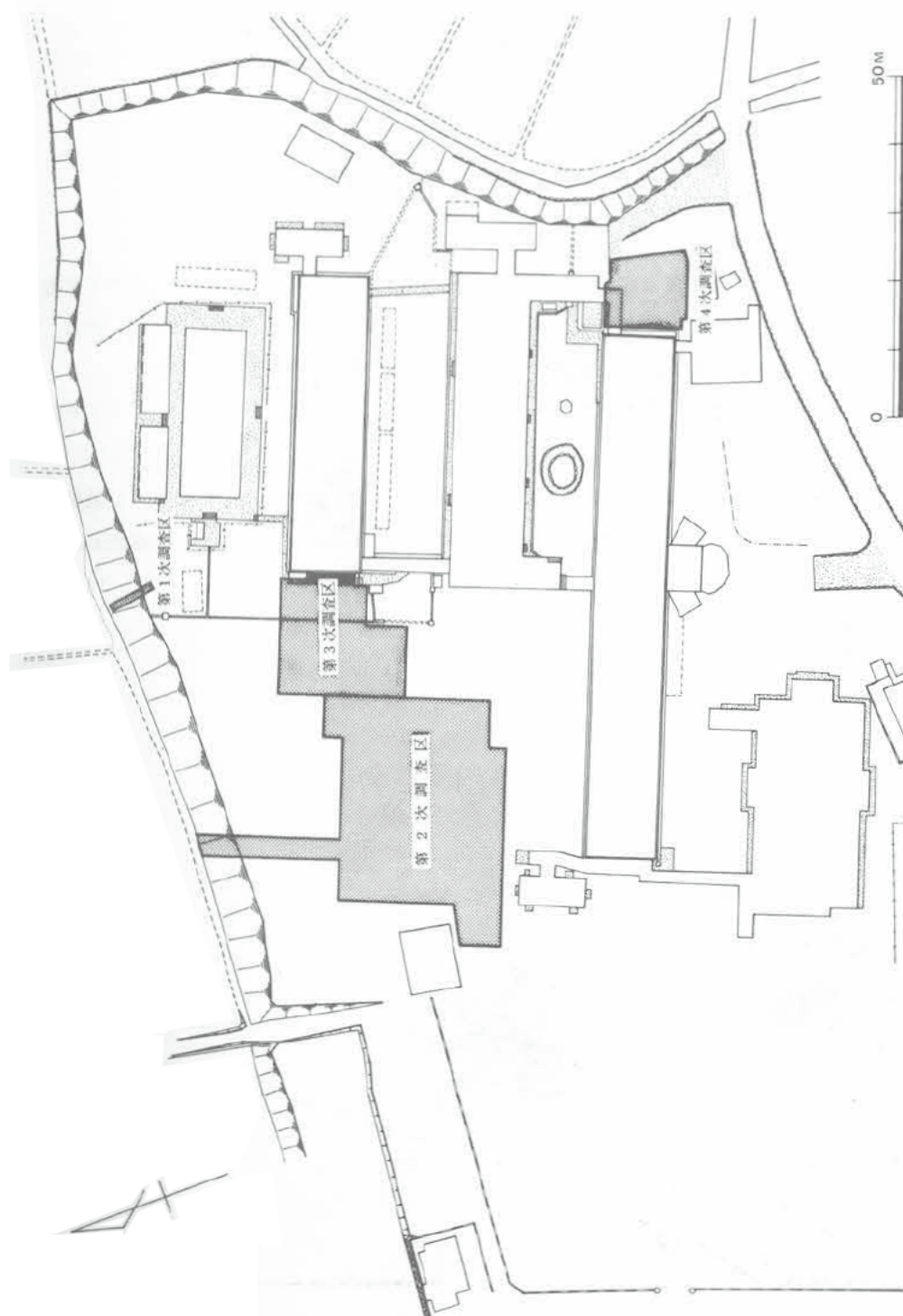
調査の遂行にあたり、地元の■■■■、■■■■、■■■■の各位、並びに合川小学校々長高田光憲氏はじめ諸先生方には、多大の御協力と御理解をいただいた。記して深く謝意を表わしたい。

	調査面積 (㎡)	調 査 期 間
第1次	7	昭和50年1月30日 ～ 1月31日
第2次	8 1 6	昭和50年5月15日 ～ 9月16日
第3次	2 7 8	昭和51年1月8日 ～ 2月6日
第4次	1 3 2	昭和51年4月19日 ～ 5月1日

第1表 筑後国府城内御蔵園遺跡調査一覧表



第1図 筑後国府跡調査地点・条坊推定図 (1/500)



第2図 御蔵園遺跡発掘調査区 (1/1000)

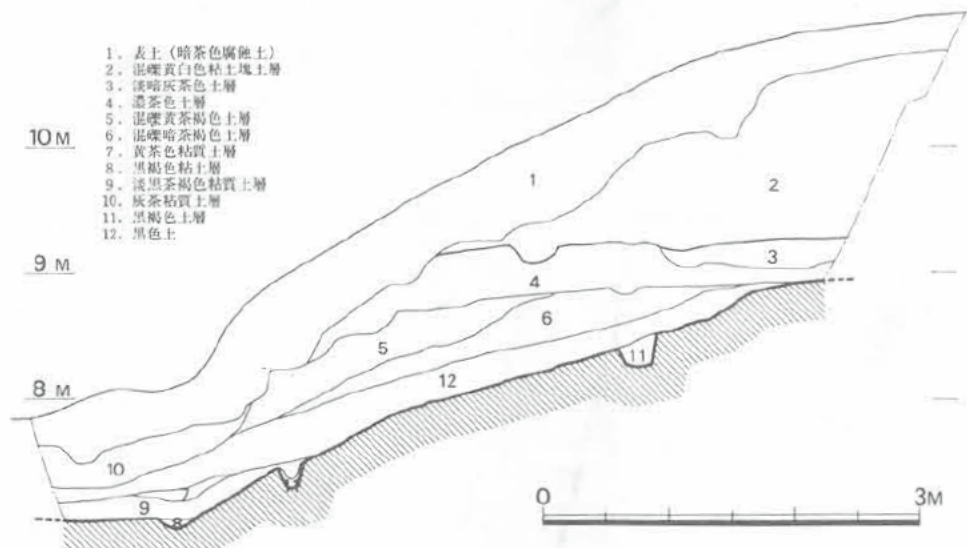
第2 調査の概要

1. 第1次調査

第1次調査は、合川小学校校庭の北縁の一部を石垣に整備するため、工事に先がけて実施した緊急調査である。この校庭の北縁辺は、宇御蔵園を東端に高良川岸まで約700 mを測る。この北の縁辺は、水田面と比高約4 mを測り、文字通り枝光台地の北の限界である。

昭和50年1月30日に緊急に調査したものである。調査は、縁辺に1 m×7 mのトレンチ調査で断面によって観察する事にした。

断面は第3図に示すとおりであるが、地山面は弥生時代の土器を出土するピットが数個発見された。地山直上には黒色土が堆積しており、その上層には、礫を混入した黄茶褐色土層や暗茶褐色土層といった土師器片を包含する土層が堆積している。この結果からみると、12の黒色土層は国府当時の地表面ではないかと考えられる。包含層並びに地山の一部はカットされて、2度にわたる埋め立てが行なわれ、現在の形状を呈している。(櫻井)



第3図 第1次調査断面実測図 (1/50)



第4図 第2次調査遺構配置図 (1/20)

2. 第 2 次 調 査

第2次調査は、合川小学校体育館建設に先がけて、発掘調査を行なったものである。遺構は溝状遺構3条、竪穴住居跡8軒、土壇9基、掘立柱建物址1軒、その他多数の柱穴を確認している。各遺構の概要は、『筑後国府跡（Ⅰ）』において記しており、本報告では遺物の概要のみを記すことにした。

遺 物 の 概 要

SD1出土の遺物

SD1は、層位を大きく分けると、3層に分けられる。第1層は暗褐色粘質土層であり、須恵器・土師器・白磁等を出土する。第Ⅱ層は黒褐色粘質土層であり、包含する遺物はほとんどみられない。第Ⅲ層は、第Ⅰ層と同様な暗褐色粘質土が堆積しており、出土遺物は、弥生末期の土器や古式土師器等がみられる。

第Ⅰ層（第5図）

須恵器

杯身（第5図1～5）

杯身は2類に分けられ、Ⅰ類は高台を有するものと、Ⅱ類は高台を有せず、口径が大きいものである。

Ⅰ類（1～4）

高台を有するもので、1は口径約13.1cm、高さ約5.3cmを測り、体部は、底部からラッパ状に外反する。また、高台は裾が開いている。2はやや小型のもので、口径約9.6cm、高さ約4.2cmを測り、体部は直線的に外反する。高台は断面函形のものを貼り付けている。3・4は口縁部を欠いており、口径は不明であるが、1よりも大きい。高さは現存する部分で約3.6cmを測る。体部は、3はS字状を、4はやや直線的な形状を呈し、高台は2と同様な函形を貼り付けているが、4の高台の内側は稜を有している。

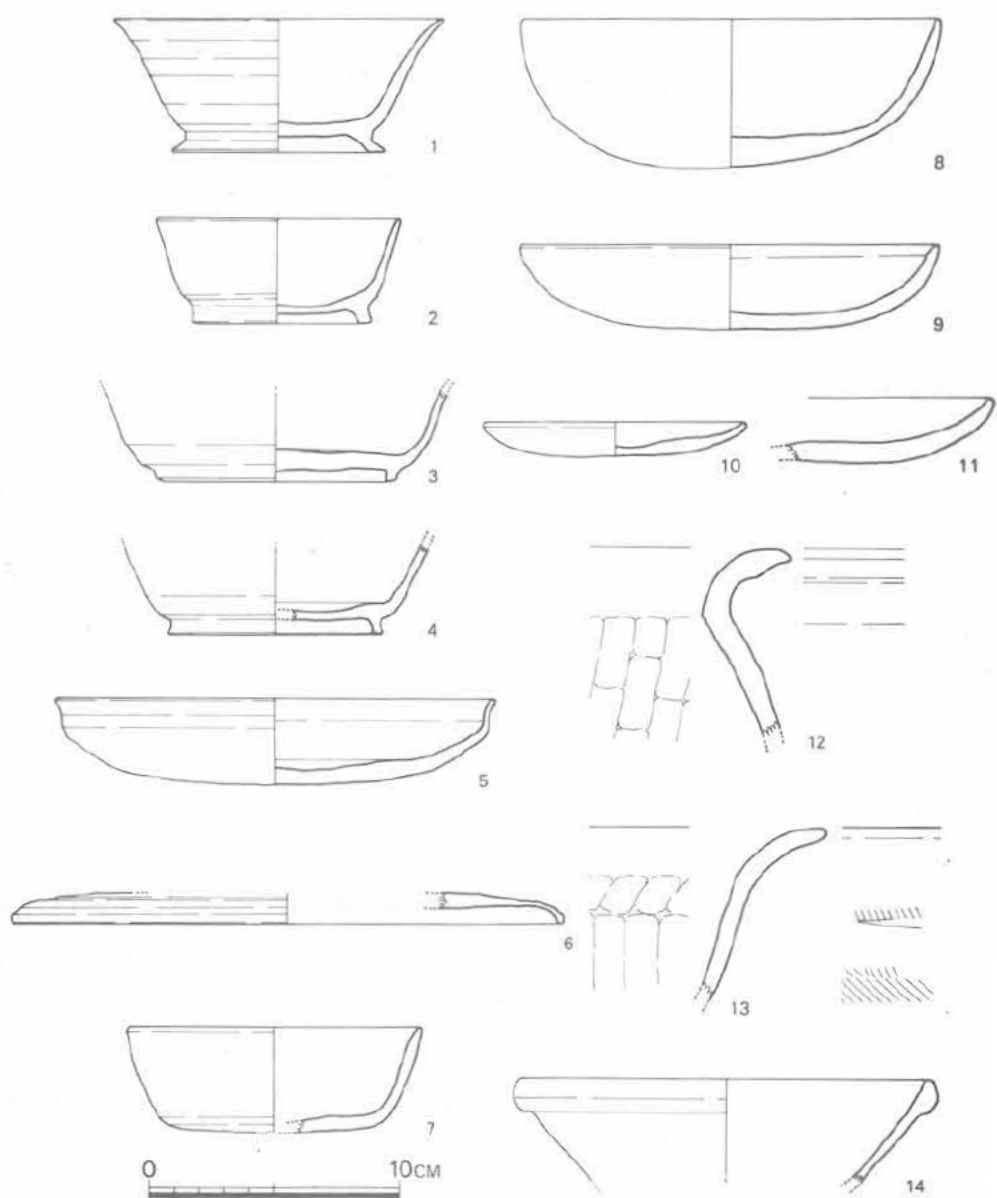
Ⅱ類（5）

5は口径約17.7cm、高さ約3.5cmを測る。底部は丸く調整されており、体部は垂直に立ち上がる。さらに口縁端部において外反している。

土師器

杯蓋（第5図6）

口径約22cmを測り、天井部は欠損して高さは不明であるが、現存の高さは約1.5cmである。体部は、やや扁平な天井部から丸味を持ちながらほぼ垂直に口縁部を作っているが、口縁端部にふくらみをもたせている。天井部に握みを有したかどうかは不明であるが、他の例からみる



第5図 SD1第I層出土遺物実測図(1/4)

と、撮みを有していても疑問はないと思われる。

杯身(第5図7-11)

杯身は3類にわけられる。

I類(7)

7は、口径約11.8cm、高さ約4.2cmを測る。やや扁平な底部に、ほぼ直線的に外反する体部

を有する。口縁部は器肉にややふくらみを有し、端部において丸く整えられている。体部と底部の境には稜は有しない。

Ⅱ類(8)

口径約16.7cm、高さ約5.9cmを測る。器形は全体的に丸味をもち、体部と底部の境がはっきり区別がつかない。口縁端部は丸く整えられている。

Ⅲ類(9~11)

Ⅱ類の杯身が浅くなったもので大小みられる。9は口径約16.7cm、高さ約3.4cmを測る。器形はまさに8を浅くしたものである。10は、小型で口径約10.5cm、高さ約1.4cmを測り、皿状の遺物である。11は小破片であり、口径は不明であるが、10を大型にしたものであろう。

高杯(13)

杯部の小破片であり、詳細は不明であるが、ラッパ状に口縁部が外反している。器壁の内側を筧、外側をハケにより調整している。

甕(12)

甕の口縁部の小破片である。球形の胴部に外湾する口縁部がつけられ、胴部内側は筧による調整、口縁部はハケによる調整がみられ、その境に稜を有している。

白磁(14)

口縁部の小破片で、口径約16.8cmで高さは不明である。胎土は白色を呈し、灰色がかった白色の釉をかけている。釉は体部のみで、底部には釉がかかっていない部分がみられ、内外面に貫入がみられる。

紡錘車(第6図)

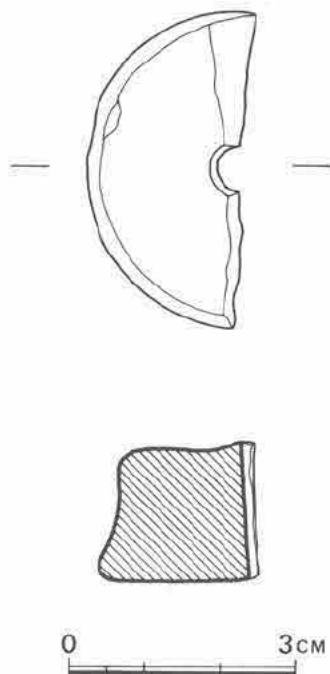
断面が台形で滑石の紡錘車である。上面はやや中窪みであるが、下面は平坦な面を呈する。側面は内湾気味に削り込まれている。

以上は、第1層より出土したものである。

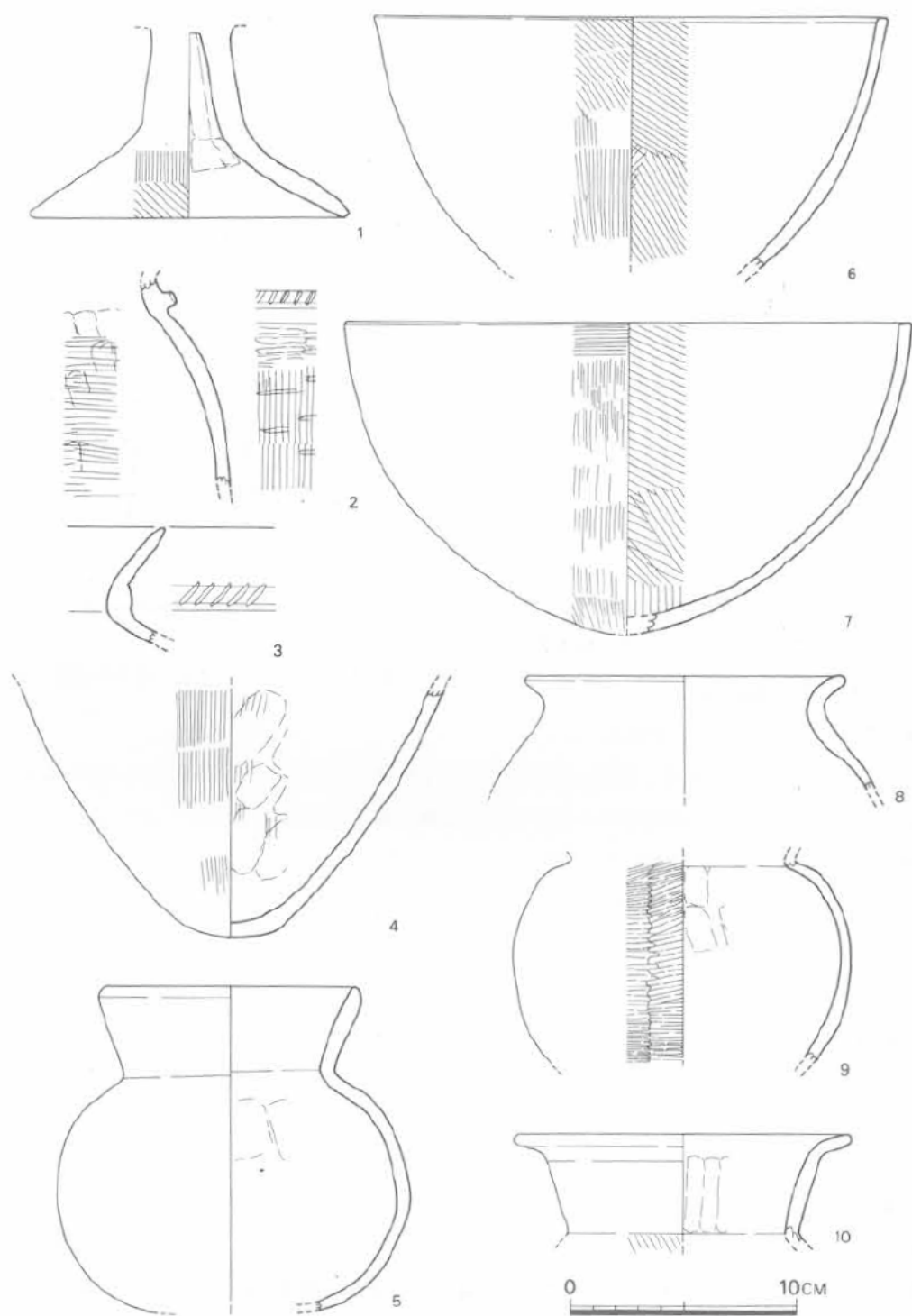
第Ⅲ層(第7図)

高杯(1)

杯部を欠いているが、裾開きの脚部である。脚高約8.4cm、裾径約14.1cmを測る。脚の内外面には細い刷毛目がみられ、柱状部は筧による調整が行なわれ、外面は筧磨きを加えられている。



第6図 SDⅠ第Ⅰ層出土遺物実測図(1/3)



第7図 SD1第Ⅲ層出土遺物実測図(1/4)

甕形土器（2～4）

2・3は頸部の破片であるが、肩のはらない胴部に「く」の字の口縁部を有している。頸部に断面函形の突帯を貼り付け、突帯上には刻目が施されている。4は底部であり、長卵形を呈し、2または3と同様な口縁部を有していたと思われる。2の胴部は、表面の肩部において細かい刷毛目が横方向、胴部に下がつて櫛目による調整方法が施されている。一方内面は頸部において指押え跡がみられ、胴部においては指押え後、横方向による櫛目調整が行なわれている。4の内面は指押え後、部分的に縦方向の櫛目、外面は縦方向の櫛目調整のみが施されている。

壺形土器（5・8～10）

5は、球状の胴部に直線的に外反する口縁部をもつ。口径は約10.5cm、高さは底部が欠損しているが推定高約14.3cm、胴部最大径約15.6cmを測る。器壁の外面は篋磨きが施され、内面は指押え跡がみられる。8は口縁部のみで、口径約14.1cmを測る「く」の字形の口縁部である。胴部の外面はタタキ目が施されているが、摩耗が著しい。9は胴部のみで、最大径約14.8cmを測る。外面は全面にタタキ目が施され、内面は指押え跡が残っている。10は口縁部のみで、口径約14.9cmを測る。器形は胴部から直線的に外反する頸部に、ラッパ状に開く口縁部を呈している。器壁は、頸部内側は篋削りが調整され、外面は篋磨きが施されている。

鉢形土器（6・7）

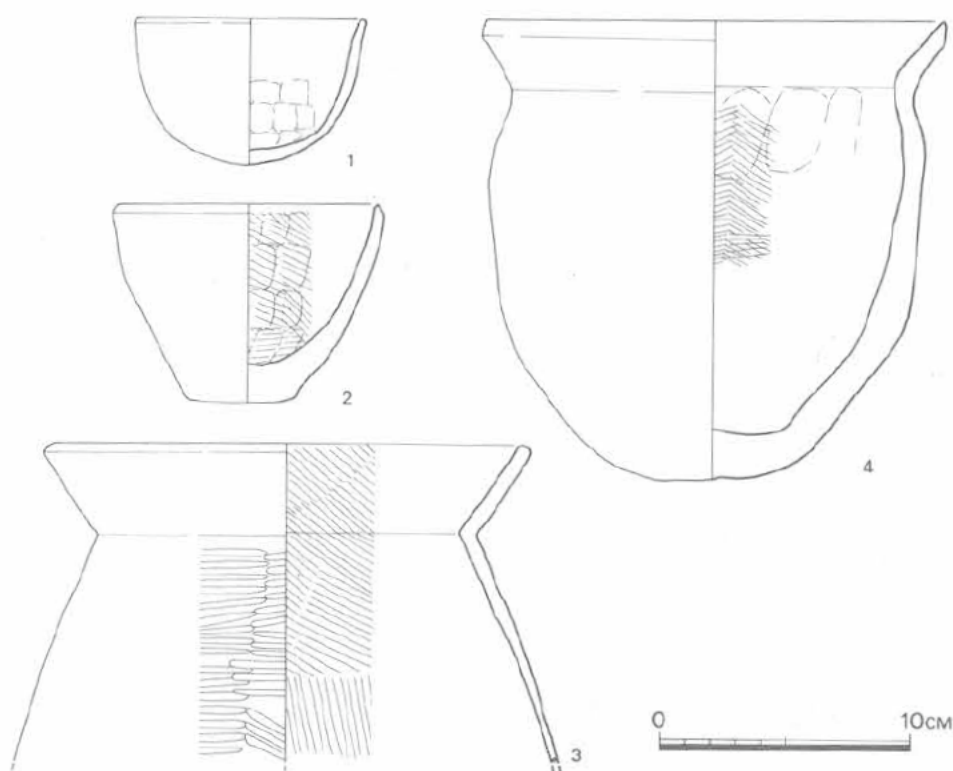
6は底部を欠損している。口径約22.6cm、現存高約11cmを測る。7は口径約25cm、高さは底部を欠損しているが約13.7cmを推定できる。いずれも深鉢であり、底部はやや尖っていると思われる。器壁の外面は、6は口縁部において斜方向の櫛目、胴部において縦方向の細い櫛目調整が施されており、7は口縁部において横方向、胴部において縦方向に細い櫛目調整が施されている。一方内面は、いずれも種々の方向の櫛目調整が施されている。

竪穴住居跡出土遺物

竪穴住居跡から出土した遺物は、第8・9図に図示するとおりであるが、ほとんどが破片であり、実測し図示しうるものは少なかった。しかし、それぞれの破片を見当すると、弥生末期から古式土師器の時期のもので、弥生式土器か土師器か判断がつけがたいものである。

SB2（第8図1・2）

いずれも手捏形土器である。1は口径約9.3cm、高さ約5.8cmを測る。器形は丸底に、口縁部は若干外反している。器壁の内面には指押え跡が残っており、外面は細かい刷毛目調整が施されている。2は口径約10.9cm、高さ約7.9cmを測る。器形は厚い平底から内湾して口縁部へ移る。口縁端部外面に面を有し、稜を持つ。器壁内面は指押えにより整形後、荒い櫛目で調整し、外面は細かい刷毛目調整が施されている。いずれも黒褐色や褐色の混合した色調をしており、二次的に火を受けた可能性もある。また、出土した位置は、住居跡中央に炭化物の堆積がみられた上面から発見されたものである。



第8図 SB 2・5・7出土遺物実測図(1/3)

SB 5 (第8図3)

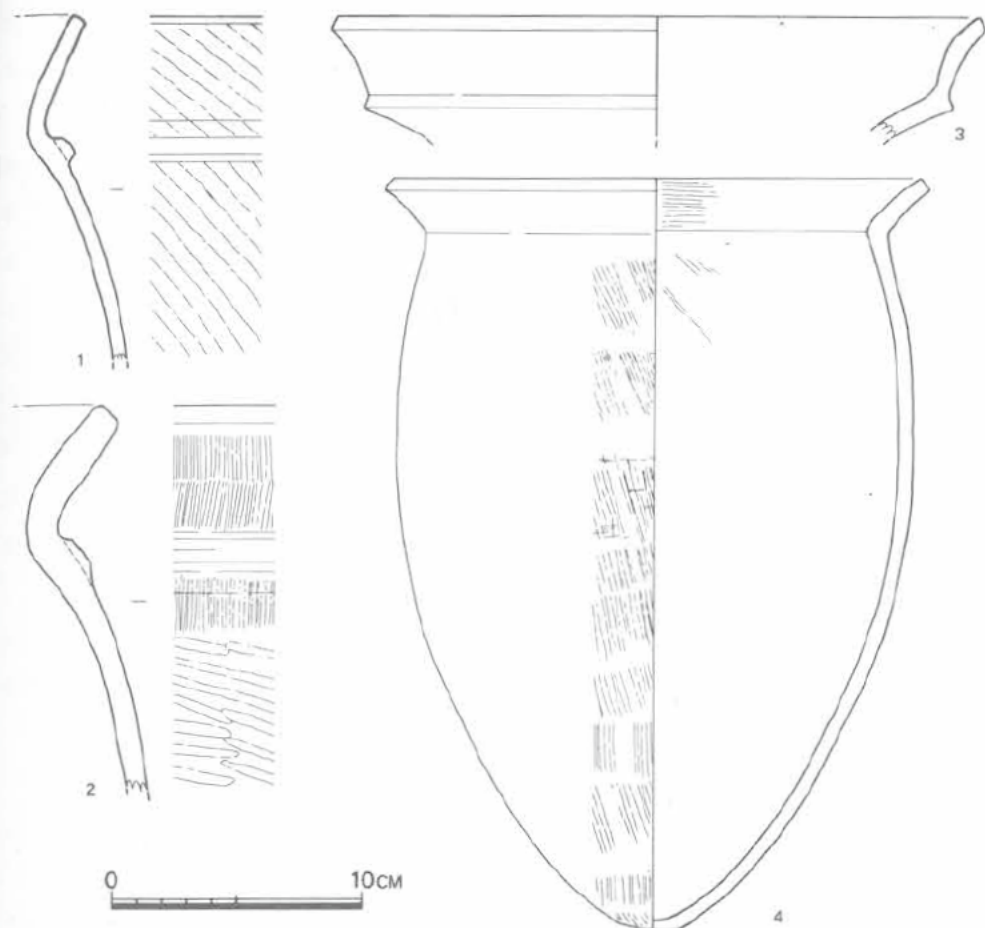
口径約19.5cm、現存高約12.5cmを測る甕形土器である。「く」の字形口縁部に肩の張らない胴部を有し、口縁端は面を持っている。色調は黄褐色を呈しており、器壁は摩耗が著しい。内面は斜方向と縦方向の櫛目、外面はタタキ目が施されている。

SB 7 (第8図4)

口径約18.4cm、胴部最大径約17.3cm、高さ約18.2cmを測る鉢形土器である。「く」の字形口縁部より胴部径のほうが小さいが、高さが口径とほぼ同値を呈する故に甕形土器とも考えられる。器肉は底部において厚く、口縁部に向うに従って薄くなる。器壁は、内側において指押え後やや細い櫛目で調整され、外面は摩耗が著しいが、刷毛目による調整であろう。

SB 8 (第9図)

1は甕形土器の「く」の字形口縁部である。頸部に断面函形の突帯が貼り付けてある。色調は黄褐色を呈し、器壁外面は幅の広い櫛目調整が施されている。2は1と同様に甕形土器の「く」の字形口縁部であるが、1と異なって大形の甕である。外反する口縁部の下の頸の部分には断面台形の突帯が貼り付けてある。色調は褐色を呈し、器肉は厚い。器壁は、内面は横方向の刷毛目調整であるが、外面は胴部にタタキ目を施し、その後全体に細い櫛目で調整している。

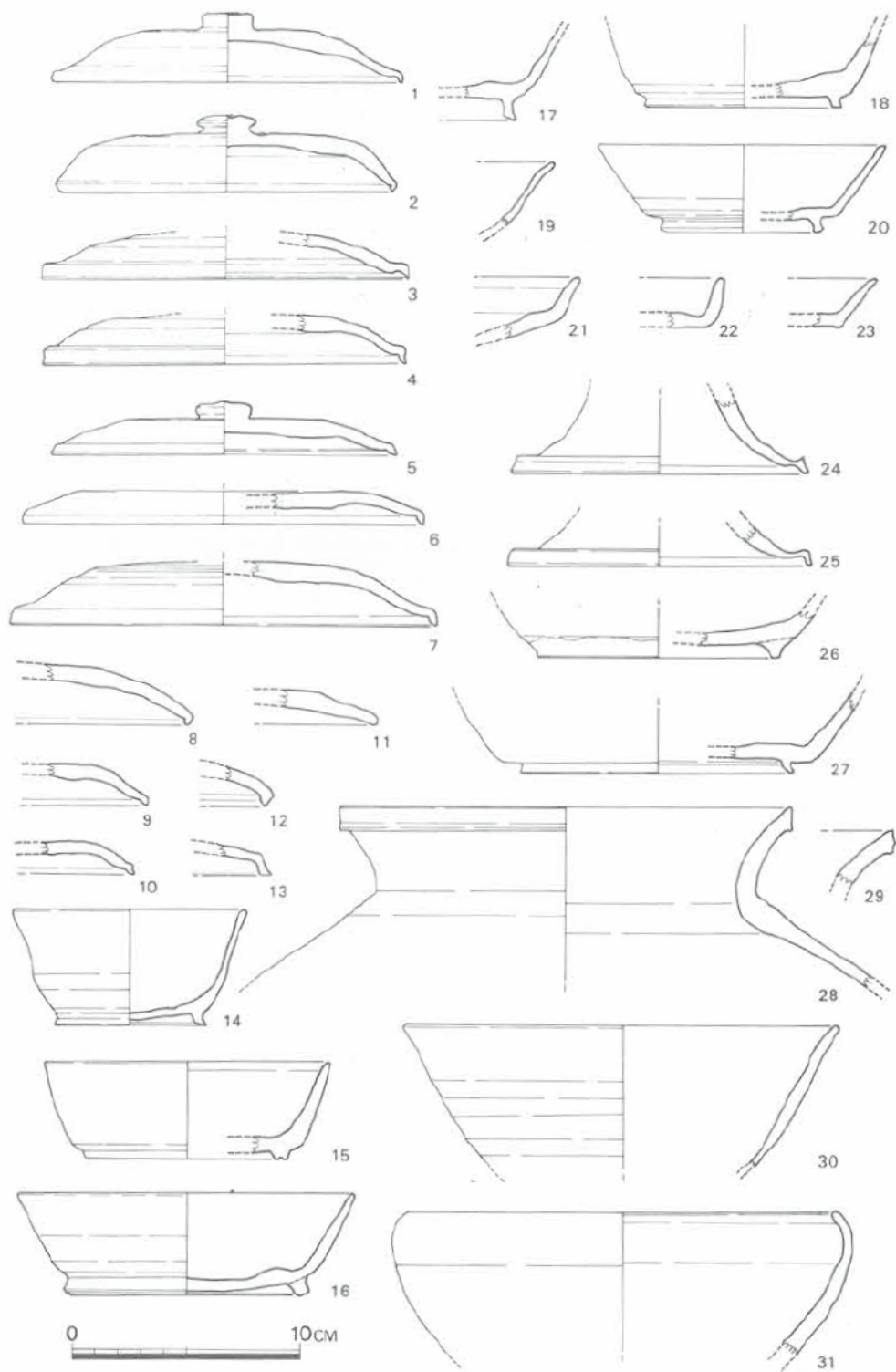


第9図 S B 8 出土遺物実測図 (1/3)

3は複合口縁壺であり、口径約26cmを測る。外反する頸部に湾曲した口縁部を貼り付けており、頸部と口縁部の境には段を有する。色調は黄褐色を呈し、器壁は細い刷毛目調整が施されている。4は長卵形の甕で「く」の字口縁を有する甕形土器である。口径約21.7cm、胴部最大径約20.5cm、高さ約29.8cmを測る。色調は黄褐色を呈するが、底部の一部は褐色を呈し、ススが附着している。器壁内面は篋による調整、外面は櫛目調整が施されている。3・4とも胎土も良質であり、焼成もしっかりしている。

土坑

土坑として検出された遺構は9基数えられるが、遺物が出土したものはSK 3～5・7・9の5基であり、そのうちSK 5出土遺物は小片であり、実測図の作成が困難なものであった。見当した結果では、弥生末期の土器または古式土師器の範疇に含まれるものである。SK 9出土の遺物は把手付盃の出土をみたが、調査中に盗難に会い、図示することができなかった。



第10図 SK 3 出土遺物実測図① (1/3)

SK3

第2次調査で最高に遺物を出土した土坑である。遺物は土師器を中心に須恵器の二種であるが、器種は多くみられる。

須恵器

杯蓋 (第10図1～13)

蓋は大別して2類に分けられる。

I類 (1～12)

口径約18.6cm～15.3cm、高さ約3.5cm～2.3cmを測る。8～12は小破片で口径は不明であるが、口径の大きさでは、I類のなかでも大小に分けられる。器形は平坦な天井部に鉤状の最みを持ち、体部はなだらかに下降し、嘴状の口縁部を有する。嘴状口縁は、形は種々であり、11・12は退化したものと思われる。色調はいずれも灰色を呈し、焼成も良好である。

II類 (13)

小破片であり、口径・器高は不明である。平坦な天井部に折れ曲がった体部を持ち、口縁部に続く。口縁端部はやや外側につまみ出され、面を有する。

杯身 (第10図14～23)

杯身は、高台を有するものと、高台を有しない2類に分けられる。

I類 (14～20)

14は、他に比べると小型であり、口径約10.2cm、高さ約5.1cmを測る。器形は丸味のある底部に高台を有し、S字状の体部を持っている。17・19は小破片であり、詳細は不明であるが、14とほぼ同種のものと思われる。15・16・18・20は、平らな底部に函形の高台を持っている。体部はほぼ直線的に外反し、口縁端部は丸く整えている。器肉はやや肉太く仕上げているが、20は、他に比べると肉薄である。色調はいずれも灰色を呈しており、焼成も良好である。

II類 (21～23)

いずれも小破片であり、詳細は不明である。21は、他に比べると丸味を持つ底部と思われる。色調はいずれも灰色を呈し、焼成も良好であるが、22は器壁の摩耗が著しい。この類の遺物は、ここでは杯身として取扱ったが、皿としての形状と考えられるものである。

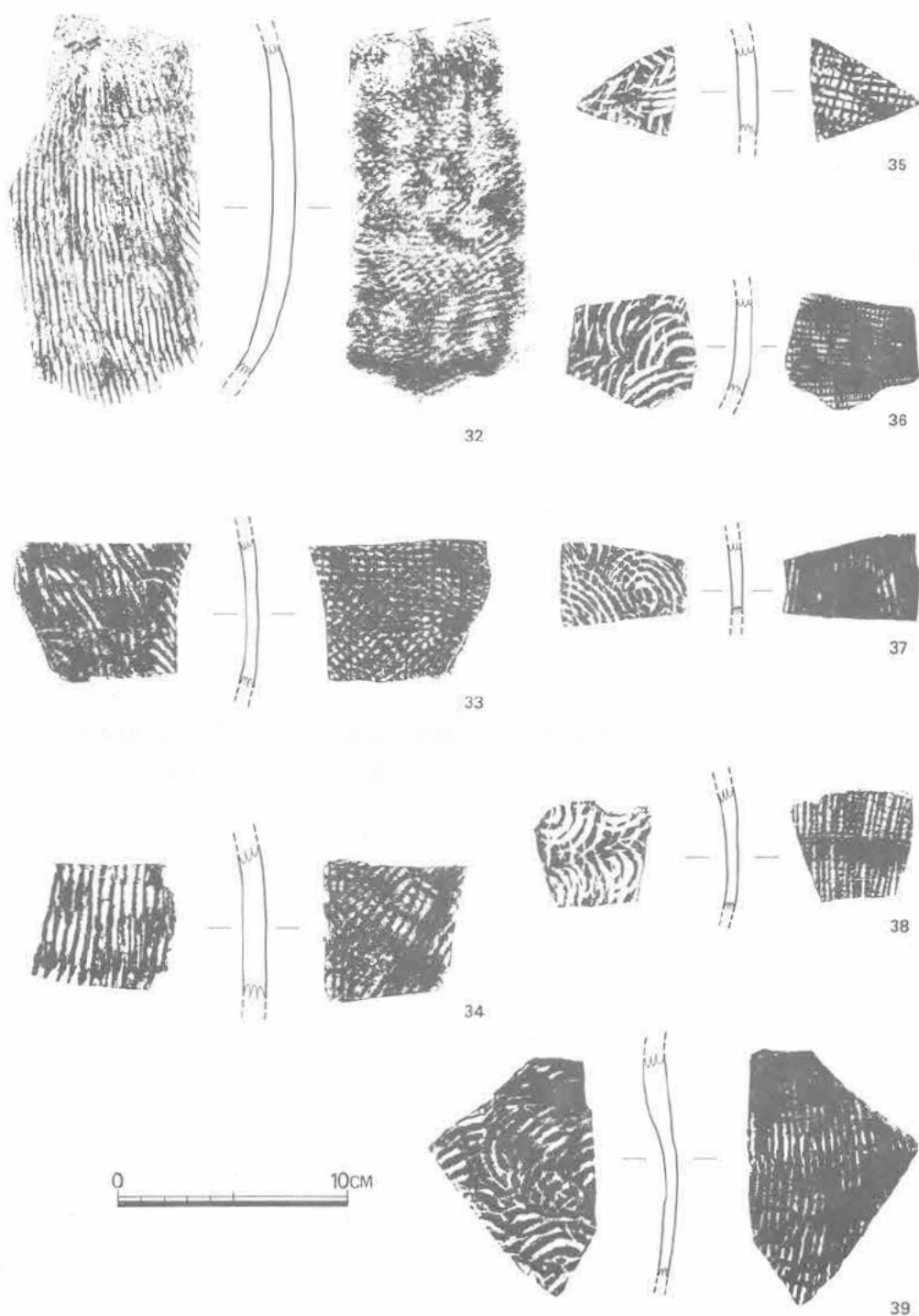
高杯 (第10図24・25)

いずれも脚裾部のみである。ラッパ状に開く裾部に嘴状の裾端部がみられる。24の脚部は輪積製法の痕跡を残しているが、器壁の調整も良く、焼成も良好である。25は、調整並び焼成も良好であり、器壁に自然灰釉がみられる。

壺 (第10図26)

底部の小破片で、全体の器形は不明であるが、長頸壺ではないかと思われる。

盤 (第10図27)



第11圖 SK 3 出土遺物拓影 (1/3)

底部のみで詳細は不明であるが、断面嘴状の高台を付けた高台付盤と思われる。

甕 (第10図28・29、第11図32～39)

29は小破片で詳細は不明であるが、28は小型の甕で、「く」の字形の口縁部で口縁端部は垂直につまみ上げている。また口縁端下部に突帯を有している。胴部は、外面に格子目、内面には青海波文のタタキ目がみられる。その他の甕は胴部の破片がいくつかみられるが、タタキ目文様の異なるものだけを第11図に示した。

碗 (第10図30)

口径約19cm、高さは底部を欠いているので、現存では約6.2cmを測る。外反する体部は器肉が薄く、外面は、体部下半は篋による調整、上半と内面は横撫で調整が施されている。色調は暗灰色を呈し、胎土・焼成とも良い。

鉢 (第10図31)

鉄鉢形須恵器で、口径約18.4cm、現存高約6.5cmを測る。外反する体部に、口縁部は内湾し口縁端部は丸く整えている。色調は暗灰色を呈し、胎土は良質であり、焼成も非常に良好である。

土師器

杯蓋 (第12図40～48)

杯蓋は大小と2類に分類できる。

I類 (40・41)

口径約13cm～12.2cm、高さ約3.6cm～3.2cmを測る。丸味のある天井部からなだらかに体部に移り、天井部と体部の境を有しない。口縁部を内側に折り曲げて、端部は丸く整えている。天井部に、40は中高の釦形、41は不整形の撮みを有する。色調は赤褐色を呈し、胎土は良質である。焼成も良好である。

II類 (42～48)

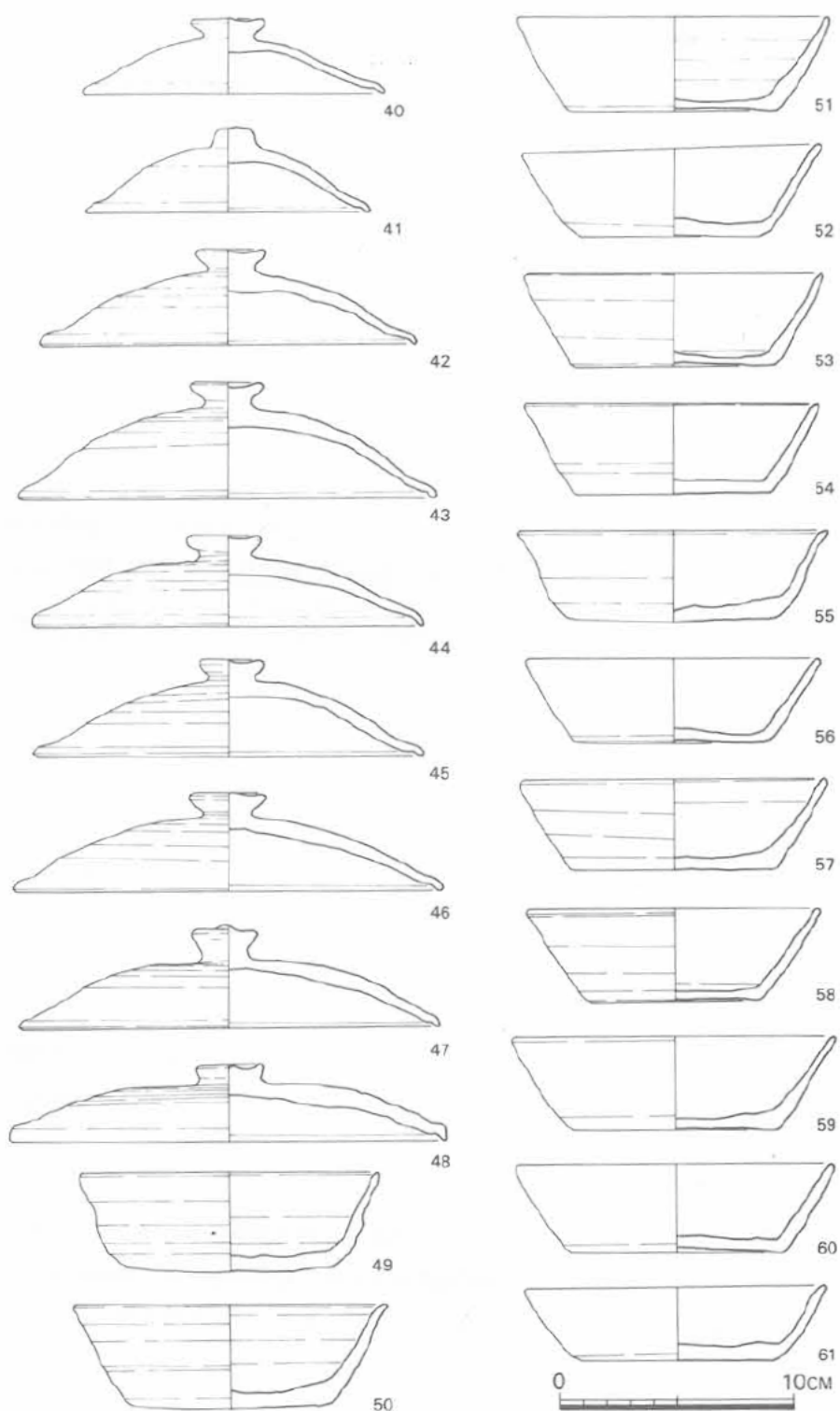
口径約18.8cm～16.2cm、高さ約5cm～3.3cmを測る。器形はI類と同様であり、天井部には中高の釦形撮みを有し、47の撮みは他に比べて高さの高い撮みである。色調は赤褐色を呈し、胎土は良質のものであり、焼成も良好である。

杯身 (第12図49～61)

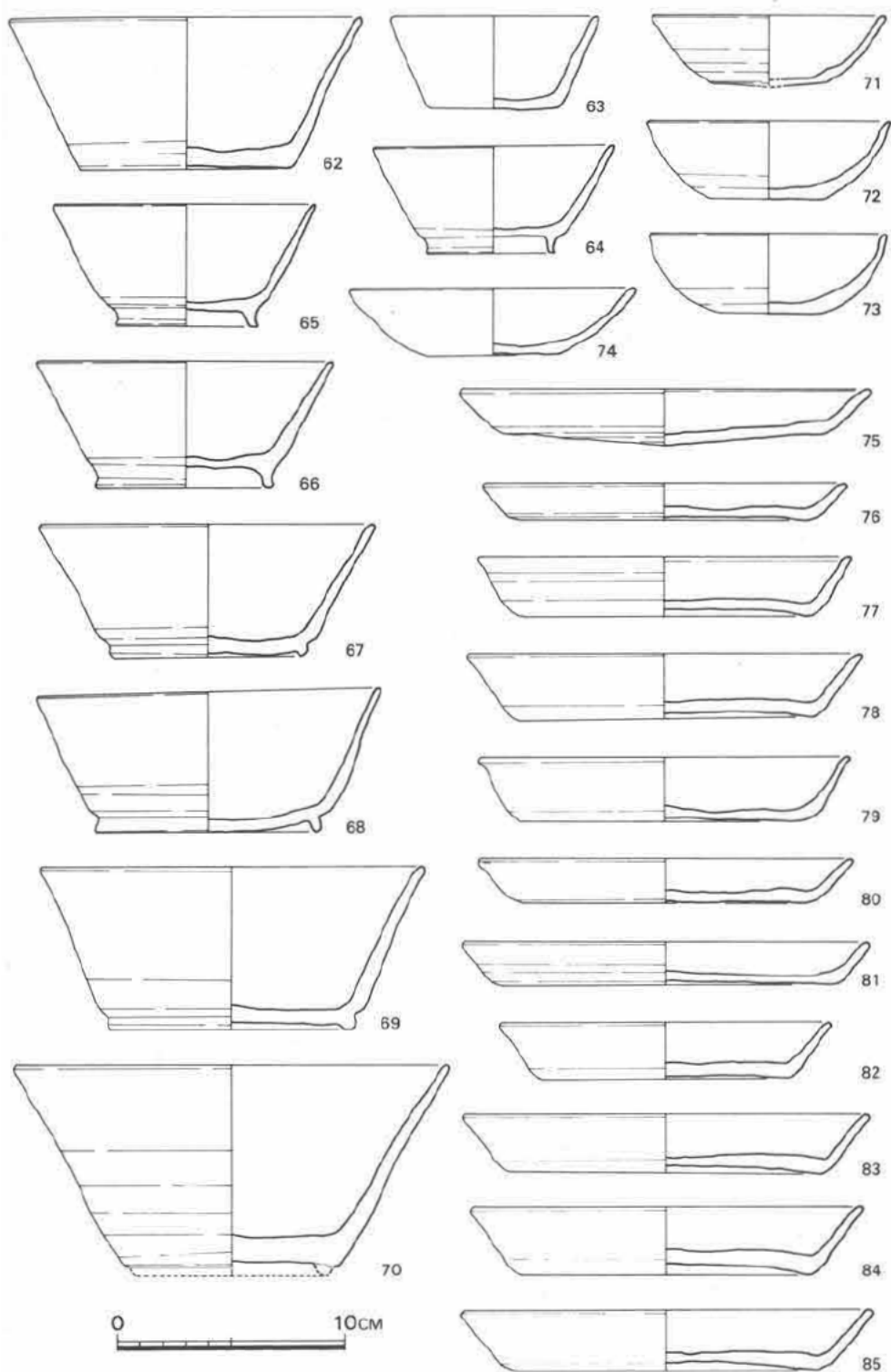
口径約14cm～12.6cm、高さ約4.5cm～3.3cmを測る。平坦な底部に外反する体部を持っている。底部と体部の境には、篋による面とりが施されている。全体の中かで、49は底部に若干丸味をもち、体部が曲線的になる。その他、55・61は平坦な底部にS字形の体部を有するものや、直線的な体部に口縁部だけを若干外反させるものがみられる。

碗 (第13図62～74)

碗は形態的に3類に分類できる。



第12図 SK 3 出土遺物実測図② (1/3)



第13図 SK 3 出土遺物実測図③ (1/2)

I類 (62・63)

いずれも平底に直線的に外反する体部を持つもので、63は口径約9.1cm、高さ約4.1cmと小型であるが、62は口径約15.6cm、高さ約6.6cmと大型になる。色調は、いずれも赤褐色を呈し、焼き上がりは非常に良い。胎土も良質なものを使用している。

II類 (64~70)

I類の碗に高台が付いたものである。高台は函形のものから、それが退化したようなものがみられる。形態は口径約10.5cm、高さ約4.7cmの小型のものから、口径約19.1cm、高さ約9.1cmの大型のものまで種々みられる。色調は赤褐色を呈し、焼き上がりも良い。

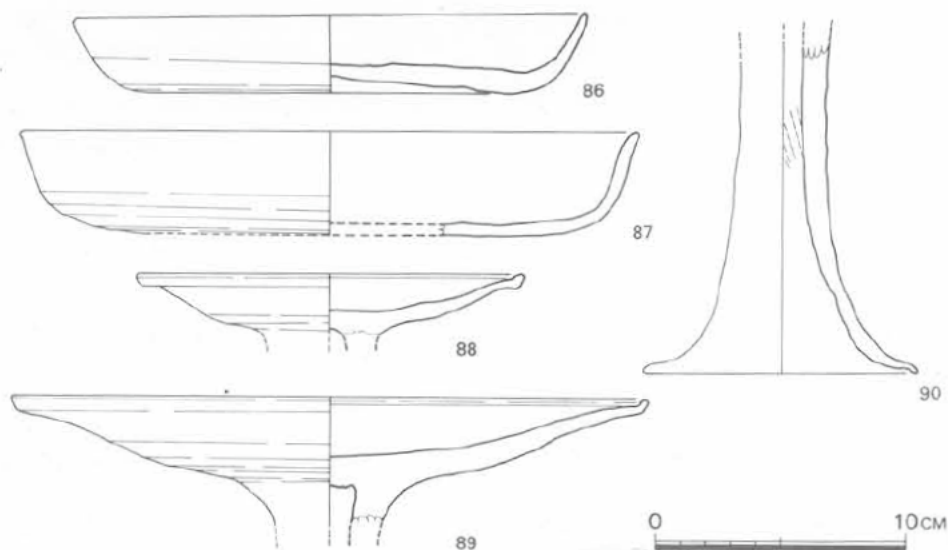
III類 (71~74)

I・II類とは形態の異なる碗である。器形は平底に内湾する体部を有している。口径約10.2cm、高さ約3.1cmのものから、口径約12.6cm、高さ約3cmのものまで種々みられる。器壁の調整は、底部から体部下半は篋により、体部上半から内面は撫でによる調整法が施されている。色調は赤褐色を呈し、焼き上がりは良く、胎土も良質なものを使用している。

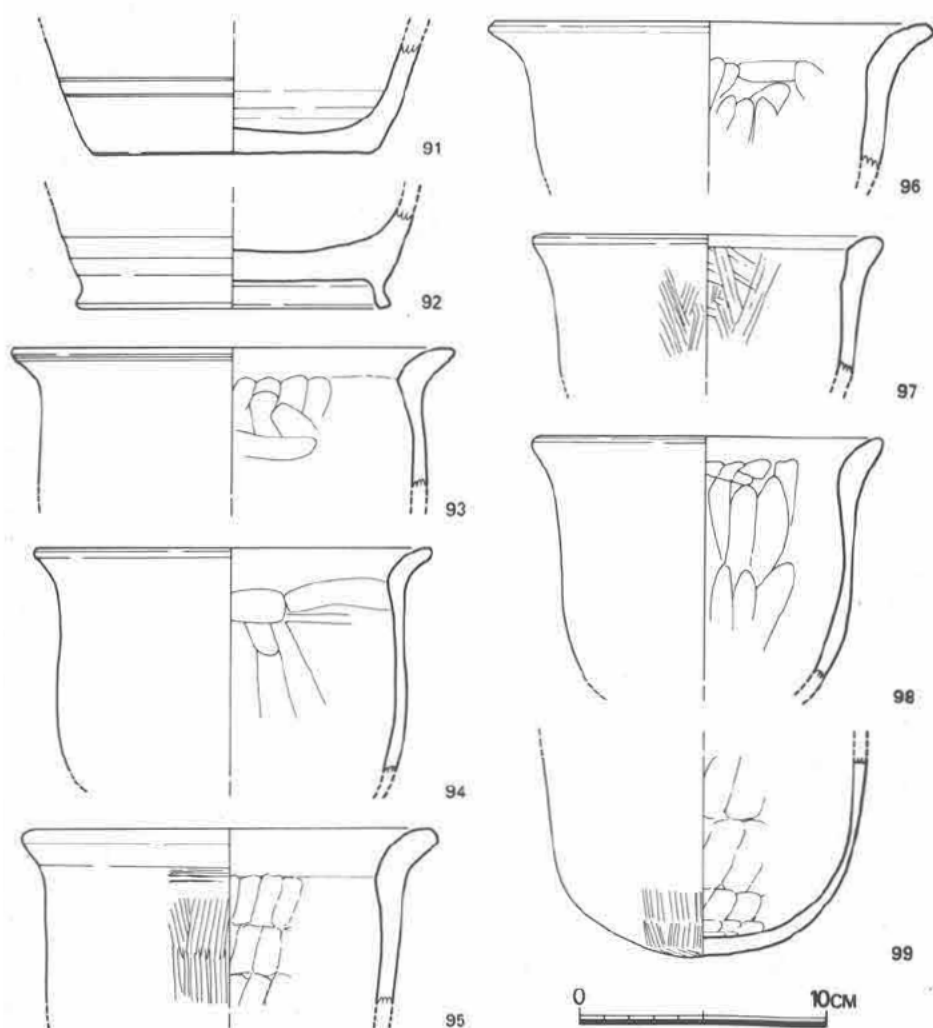
皿 (第13図75~85)

口径約14.5cm~18cm、高さ約3cm~2cmを測る皿である。形態は平坦な底部に外反する体部を有し、底部と体部の境に、篋による面とりを施した皿もある。底部は、75は丸味を持ち、不安定なものであるが、その他はいずれも上げ底を呈している。色調は赤褐色や暗赤褐色を呈し、調整も良く、焼き上がりも良好である。

盤 (第14図86・87)



第14図 SK3 出土遺物実測図④ (1/3)

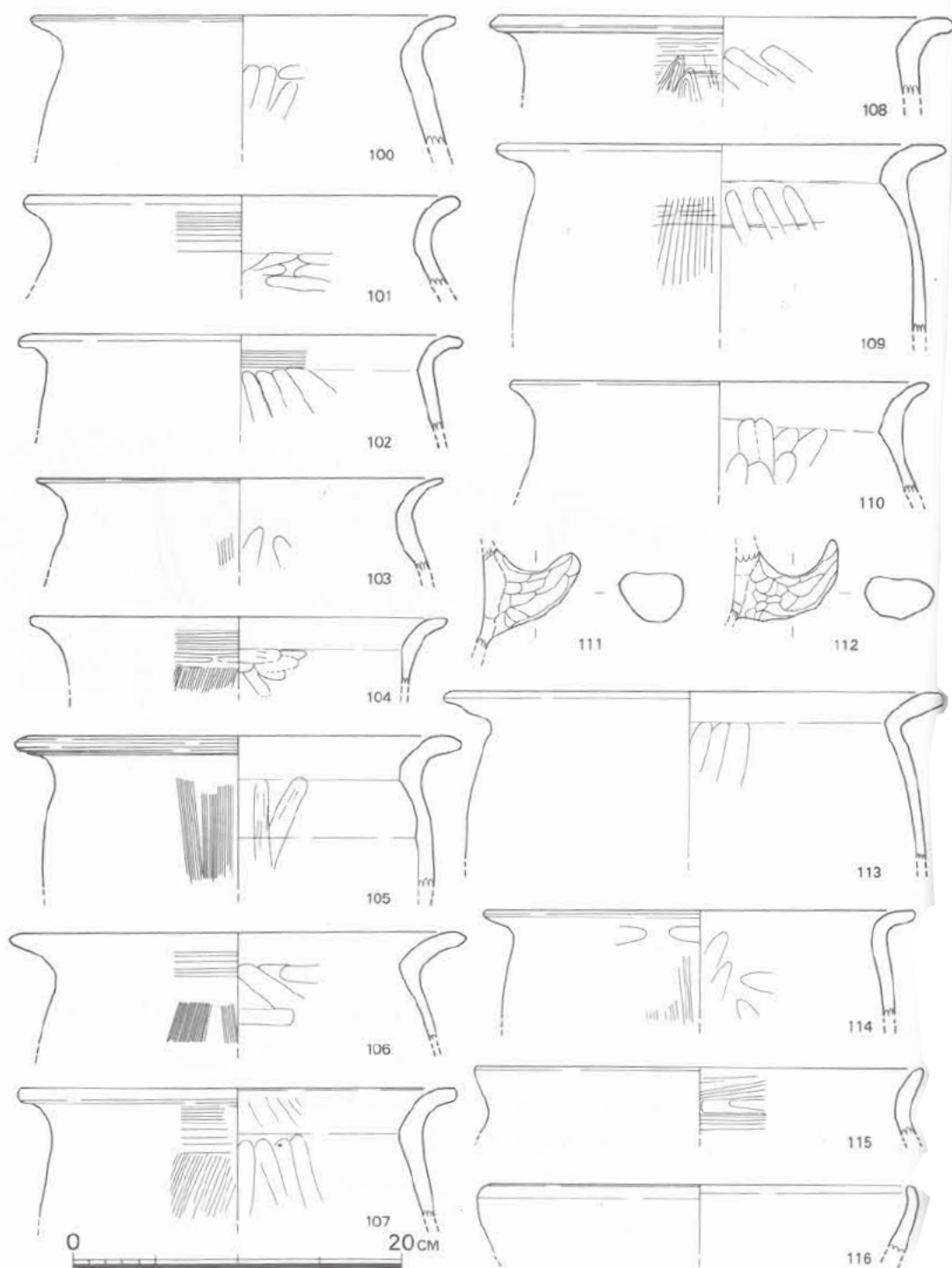


第15図 SK 3 出土遺物実測図⑤ (1/2)

86は口径約20.5cm、高さ約3.1cmを測る。上げ底になった底部に曲線的な体部を有する前記した皿と似ているが、体部と底部の境に丸味を持ち、口径が大きくなる。87は86よりさらに大きくなり、口径約24.8cm、高さは推定で約4.2cmを測る。形態は平坦な底部に湾曲した体部、さらに口縁部は外反している。色調は赤褐色または黄褐色を呈しているが、87は黒褐色の部分もみえる。86は胎土も良質であり、焼成も良好で、器壁は堅固である。87は、胎土は小石粒を含んでいるが良質であろう。焼成も仕上げは良い方であろうけれども、器壁の摩耗が著しい。

高杯 (第14図88～90)

いずれも高杯の杯部のみで、高さは不明である。88は口径約15.5cmを測る。形態は丸味のある底部を持ち、口縁部は外反する。さらに口縁端部においてつまみ上げている。89は88を大型



第15図 SK 3 出土遺物実測図⑥ (1/4)

にしたもので、口径約25.5cmを測る。90は脚部で杯部を欠損している。裾部径約11cm、現存高約13cmを測る。裾部はラッパ状に開き、端部において内湾する。柱状部内面にしぼりの痕跡がみられる。色調はいずれも赤褐色を呈している。調整も底部は篋削りで整えており、焼成も仕上りは非常に良い。胎土も良質なものを使用している。

壺（第15図91・92）

いずれも長頸壺の底部であろう。91は高台を有しない。底部や体部は篋削りによって調整が施され、焼成も仕上りが良好である。胎土も良質なものが使用されている。

甕（第15図93～99、第16図100～115）

I 類（93～99）

甕の口縁部と底部である。口径は約13.9cm～7.7cmを測る。93～98は底部を欠損しているが99の持つ底部を有していると思われる。器肉の薄い胴部に外反する口縁部を有し、口縁部は肉太く仕上げている。99は底部のみであるが、前記の口縁部を持っていたと思われる。底部は丸底で器肉は薄い。器壁の内面は指押え跡が残っており、全体的には篋削りが施され、外面は櫛目による調整が施されている。

II 類（100～115）

I 類と異なって大型の甕である。いずれも「く」の字形の口縁部のみで、口縁部は胴部に比べて器肉が厚くなっている。口径は約30.6cm～24.5cmを測る。器壁外面は櫛目による調整が施されているが、内面は、口縁部は撫で、胴部は篋削りと異なった調整法を施しているために、口縁部と胴部の境に稜を有するものもある。111と112は把手であるが、表面は篋削りで調整されている。この2点がII類の甕に付設されていると断定はできないが、大きさとしては同様なものではないかと思われる。

鉢（第16図116）

口径約25.5cmを測る。底部は欠損して不明であるが、外反する体部を有し、口縁部は内湾している。前記した須恵器の鉄鉢形と同形のものと思われる。

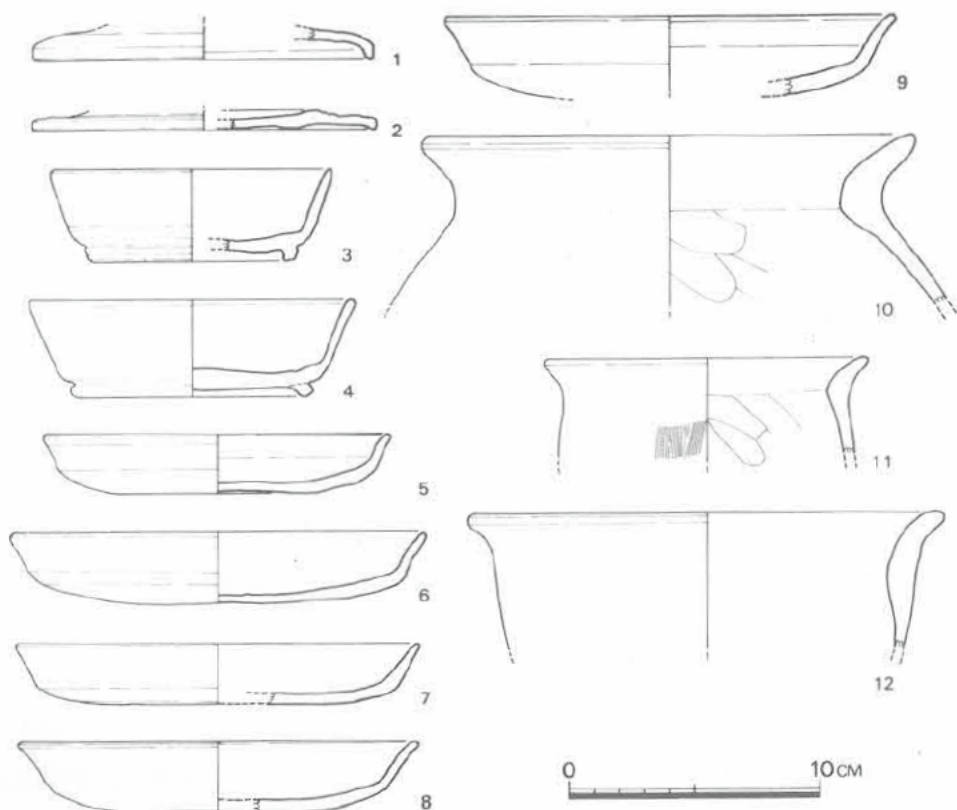
SK4（第17図）

若干の須恵器と土師器を出土している。

須恵器

杯蓋（1・2）

1は口径約13.6cmと高さ約1.3cmを残す。平坦な天井部に垂直に口縁部が折れ曲がっている。天井部に撮みが付くかどうかは不明である。2は口径約13.2cmを測る。天井部は平坦であり、中央部が窪んでいるが、若干変形をしているのではないかと思われる。口縁部は嘴状が退化した様な口縁部である。色調は灰色を呈し、焼成は良好であり、胎土も良質なものを使用している。



第17図 SK4 出土遺物実測図 (1/5)

杯身 (3・4)

いずれも平坦な底部に、直線的な体部を有し、口縁端部は丸く整えている。底部には断面両形の高台を付している。口径約10.3cm、高さ約3.7cmの3と、口径約13.2cm、高さ約4cmの4の2種である。

土師器

皿 (5～9)

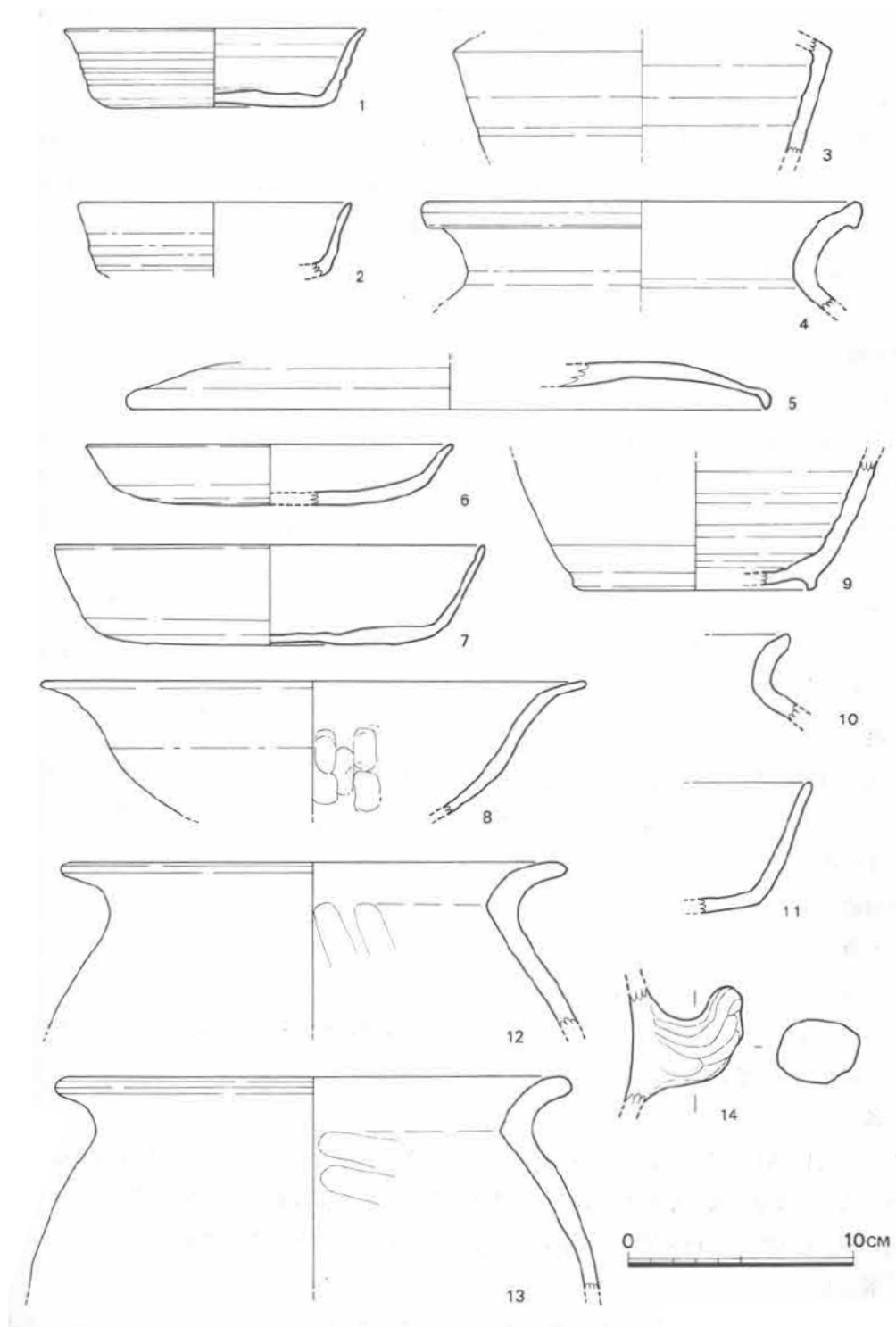
口径約13.9cm～17.9cm、高さ約2.9cm～2.5cmを測る。若干丸味を持つ底部に、外湾する口縁部を有する。底部と口縁部を明瞭に区分する線はないが、底部は篋削りによる調整、口縁部は撫でによる調整と、調整方法によって区分されられると思われる。色調はいずれも赤褐色を呈し、焼成は極めて良い。

甕 (10～12)

甕は大型のものと小型のものと2類に分類できる。

I類 (10)

大型の甕の口縁部で口径約19.5cmを測る。口縁部は「く」の字形口縁を呈し、口縁部は肉太



第18図 SK 7 出土遺物実測図 (1/3)

くつくられている。器壁外面は細い刷毛目で調整されており、内面は口縁部を刷毛目、胴部を篋削りで調整しており、口縁部と胴部の境に稜を有する。

Ⅱ類 (11・12)

小型の甕の口縁部である。11は口径約12.8cmを測る。胴部は張りがなく、外反する口縁部を有する。口縁部は肉太くなっている。調整は、外面は刷毛目、内面は口縁部は撫で、胴部は篋削りとは異なった調整を施しており、口縁部と胴部の境に稜を有する。12は外反する口縁部を持ち、胴部と口縁部の境は不明瞭である。

SK7 (第18図)

須恵器

杯身 (1・2)

1は口径約13.5cm、高さ約3.6cmを測る。平坦な底部に外反する体部を有し、口縁部はさらに外に開く。体部には3条の沈線が施されている。2は底部を欠損しているが、口径約12.3cm、現存高約3.4cmを測る。体部は、若干S字形を呈している。色調はいずれも暗灰色を呈し、焼成は非常に良好である。胎土には小石粒を多く含んでいる。

壺 (3)

長頸壺の胴部の一部である。器壁の外面は篋で調整が施されている。色調は灰色を呈し、焼成は非常に良い。胎土は小石粒を含んでいる。

甕 (4)

甕の口縁部で「く」の字形を呈し、口縁端部はつまみ上げている。また口縁端下部に突帯を付している。器壁は撫で調整が施されており、色調は暗灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は小砂粒を多く含んでいる。

土師器

杯蓋 (5)

口径約28.7cmを測り、高さは現存高では約2.1cmである。ほぼ平坦な天井部になだらかな体部を有する。口縁部は嘴状のものを持っている。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は良質なものを使用している。

皿 (6)

口径約16.4cm、現存高約2.9cmを測る。器形は若干丸味を持つ底部に、外反する体部を有する。底部と体部の境は不明瞭であるが、底部は篋削り、体部は撫でと異なった調整方法を施している。色調は赤褐色を呈し、焼成はしっかりしている。胎土は良質である。

盤 (7・11)

7は口径約19.2cm、高さ約4.4cmを測る。底部は中央で若干上げ底になっているが、ほぼ平坦な底部である。体部は内湾気味に開いている。11は小破片で詳細は不明であるが、深みのあ

る盤である。色調はいずれも黄褐色を呈し、焼成は極く普通と思われる。胎土は小砂粒を多く含んでいる。

碗(8)

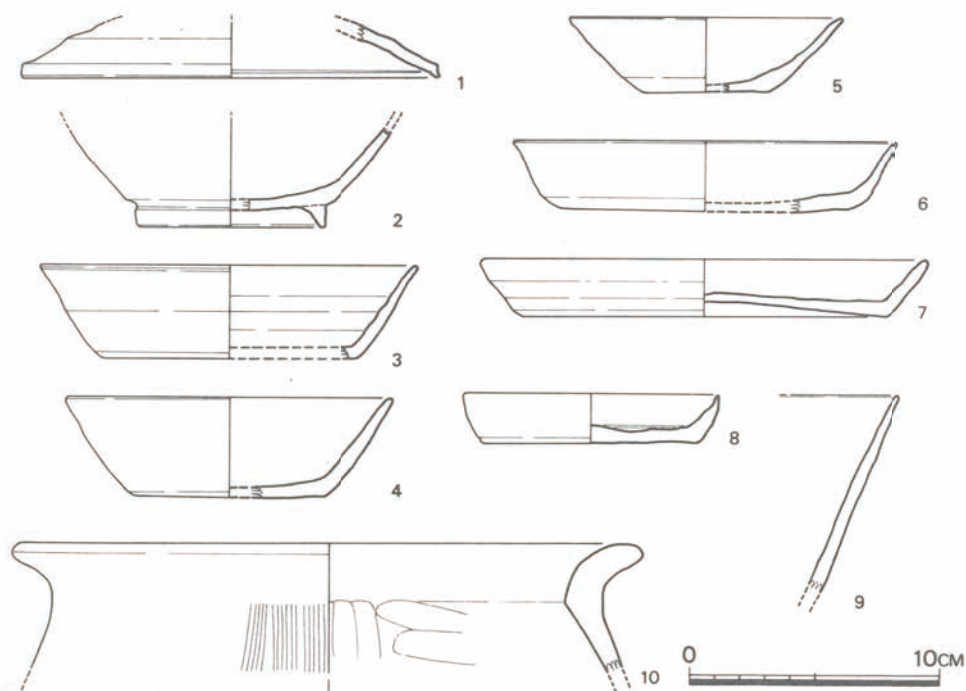
底部が欠損しているため詳細は不明である。口径約24.3cmを測る。体部は内湾気味に外に開いているが、口縁部においてさらに外に開く。器壁内外面とも体部下半は篋削り、体部上半は撫でによる調整が施されている。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。胎土も良質なものを使用している。

壺(9)

壺の胴下半部であり、高台径約10.8cmを測る。底部はやや丸味を持った底に、函形の高台を付している。胴部は篋削り調整が施されている。色調は黄褐色を呈し、焼成も良好であるが、器壁はやや摩耗している。

甕(10・12・13)

口径約22.5cm～23cmを測る。いずれも口縁部と胴部の一部で詳細は不明である。10は小破片であるが、12・13に比べてやや小さめの甕であろう。「く」の字形口縁部を持つもので、12・13は口縁部と胴部の境の内側に稜を有する。色調は黄褐色を呈し、一部に黒色の部分もみられる。焼成は普通と思われる。



第19図 G-02区出土遺物実測図(1/3)

把手 (14)

裏の把手である。器壁は篋削りによって整形している。

G-02区出土遺物 (第19図)

G-02区の南側の表土下に集中して出土したもので、遺構の存在は確認できなかった。

須恵器

杯蓋 (1)

口縁部のみで口径約16.8cmを測る。口縁端部は嘴状の口縁を有している。器壁は撫で調整が施され、天井部は篋削り調整が施されている。色調は灰色を呈し、焼成も堅固である。

土師器

杯身 (3・4)

3は口径約15.2cm、高さは底部を欠損しているが、現存高は約3.7cmを測る。体部は直線的に外反し、口縁端部は丸く仕上げている。体部内面には輪積みの痕跡がある。4は3とほぼ同形であるが、口径や底部径が小さい。いずれも色調は赤褐色を呈し、焼成は良好で、胎土も良質である。

碗 (2・5・9)

2は口縁部を欠損しているが、高台径約7.4cmを測る。ほぼ平坦な底部に丸味のある嘴状の高台を持っている。体部は湾曲気味に開いている。5は2に比べて小型であり、高台も持たない。口径約10.9cm、高さ約3cmを測る。9は小破片であるが、高台付の深みのある碗である。いずれも色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。

皿 (6～8)

6は、口径約15.4cm、高さ約2.9cmを測る。平坦な底部に外反する体部を有している。底部は篋削り調整、体部は撫で調整が施され、底部と体部の境は篋による面取りが施されている。7は、口径約18cm、高さ約2.3cmを測る。上げ底の底部に外反する体部を持っている。8は小皿になり、口径約10.2cm、高さ約2cmを測る。底部は糸切りされた平坦なものであり、体部は内湾気味である。いずれも色調は黄褐色を呈し、焼成は良好であるが、器壁の摩耗が著しい。

甕 (10)

「く」の字形口縁を持つ甕である。口径は約25.3cmを測る。口縁部は胴部に比べて肉太くなっており、口縁部と胴部の境の内側に稜を有する。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。

小 結

以上、遺物についての概要を述べたが、図示できるものは数限られており、また時間の制約から遺物を十分に検討することができなかった。ここで小結として、遺構の性格的なものや、時期的なものについて若干まとめてみたい。

溝状遺構については3条検出したが、遺物を出土した遺構はSD1・SD2の2条である。

S D 1 は、南北に走向する弧状の溝であり、第 1 層において出土した遺物は、土師器・須恵器が多く、そのほかに白磁片の出土もみられた。須恵器はⅥ～Ⅶ型式に比定され、白磁はいわゆる邢州窯の碗といわれるものである。第Ⅲ層は弥生末期の土器を包含していた。これらの遺物から弥生終末期に掘られ、溝としての役目をどの時期まで果していたかは不明であるが、不安末期まで溝状に窪んでいたと考えられる。遺構の性格としては、弧状を呈することから墳墓を圍繞する周溝または、西側に竪穴住居跡群が検出されているので、住居群を繞る環溝とも考えられる。S D 3 は、台地の北縁を東西に走向する幅約 5.2 m、深さ約 1.5 m の濠状の遺構である。遺物は小破片ばかりで、図示するのは不可能であった。最も多く出土した遺物は、土師器と須恵器であり、最下層より出土の須恵器は、Ⅵ～Ⅶ型式の形態をみせている。

竪穴式住居跡は、8 軒検出された。これらの遺構は、いずれも弥生末期に比定できる遺構であるが、S B 3 と S B 4 は重複しており、8 軒が同時に存在したのではなく、多少の時間的前後があると思われる。また方向性も 3 種類ほどに分類できる。

土壇は、9 基検出された。S K 1・2 は、出土遺物が 1 点もなく、掘立柱建物址 S B 9 よりも古い。S K 5・6 は S K 1・2 と同様に、埋土が暗茶褐色の粘質土である。この 4 基のうち、ただ一基 S K 5 より、弥生式土器か土師器か判明しがたい小破片が出土している。このことから S K 1・2・5・6 は、ほぼ同様な時期ではないかと思われる。S K 3・4・7・8・9 は、埋土が黒褐色を呈しており、土師器や須恵器が出土している。いずれの土壇も性格は不明であるが、特に S K 3 は、多量の土器群が出土し、また S B 9 の南西約 2 m に位置することから、廃棄壇ではないかと思われる。S K 3 出土の土器群は、須恵器をはじめ、旧来の技法による土師器が少量と、須恵器の製作技法と共通した、酸化炎焼成の土器が大半を占めている。また S K 4・7 から少量ではあるが、同様な遺物が発見されている。本報告では、前回の報告と同様に須恵器的酸化炎焼成の土器は、土師器に分類している。ここで注意すべきことは、これまで須恵器の「焼き損じ」としていた土器が、一つの土壇のなかに須恵器と共伴し、しかも出土遺物の大部分を占めること、及び従来の土師器の技法によるものが、甕のみに限られることである。さらに出土遺跡の位置が、国府域内という官衙関係の一角を占めることを考慮すれば、この須恵器的酸化炎焼成の土器を、従来の須恵器や土師器とは、別種の土器として分類することもできるのではあるまいか。しかし、国衙域と推定される阿弥陀遺跡では、昭和 36・47・49 年の発掘調査において、この類の土器は 1 点も出土していない。各地の国府跡や国分僧尼寺跡出土の資料を入念に検討する必要がある。（櫻井）

3. 第 3 次 調 査

昭和51年1月8日から2月6日まで約1ヶ月間の調査で、第2次調査のすぐ東側に位置する。

発掘区は、南側が高く北側が低くなっており、表面は削平され包含層は確認できない状態であった。特に、SD2以北はかなり低くなっている。46以東もすでに削平されており、遺構の確認はできなかった。また、第2次調査で確認されている土坑やピット群も検出できず、わずか13のピットを検出したにすぎず、南側になれば多くなってくるものと思われる。なお、各所に樹木移植や杭穴の痕跡がみられた。

検出遺構は、ピット13個、溝状遺構3条、住居跡1軒であった。

遺 構 の 概 要

溝 状 遺 構 (第21図)

SD1

発掘区の西南端に位置している。この遺構はすでに第2次調査により確認されている。それによると走向は、南北に弧状に走っている。今回の調査で、北端と思われる部分は攪乱を受けていることがわかった。南端は未発掘区となり、さらに弧状になるのか、まっすぐにのびるのかは不明である。

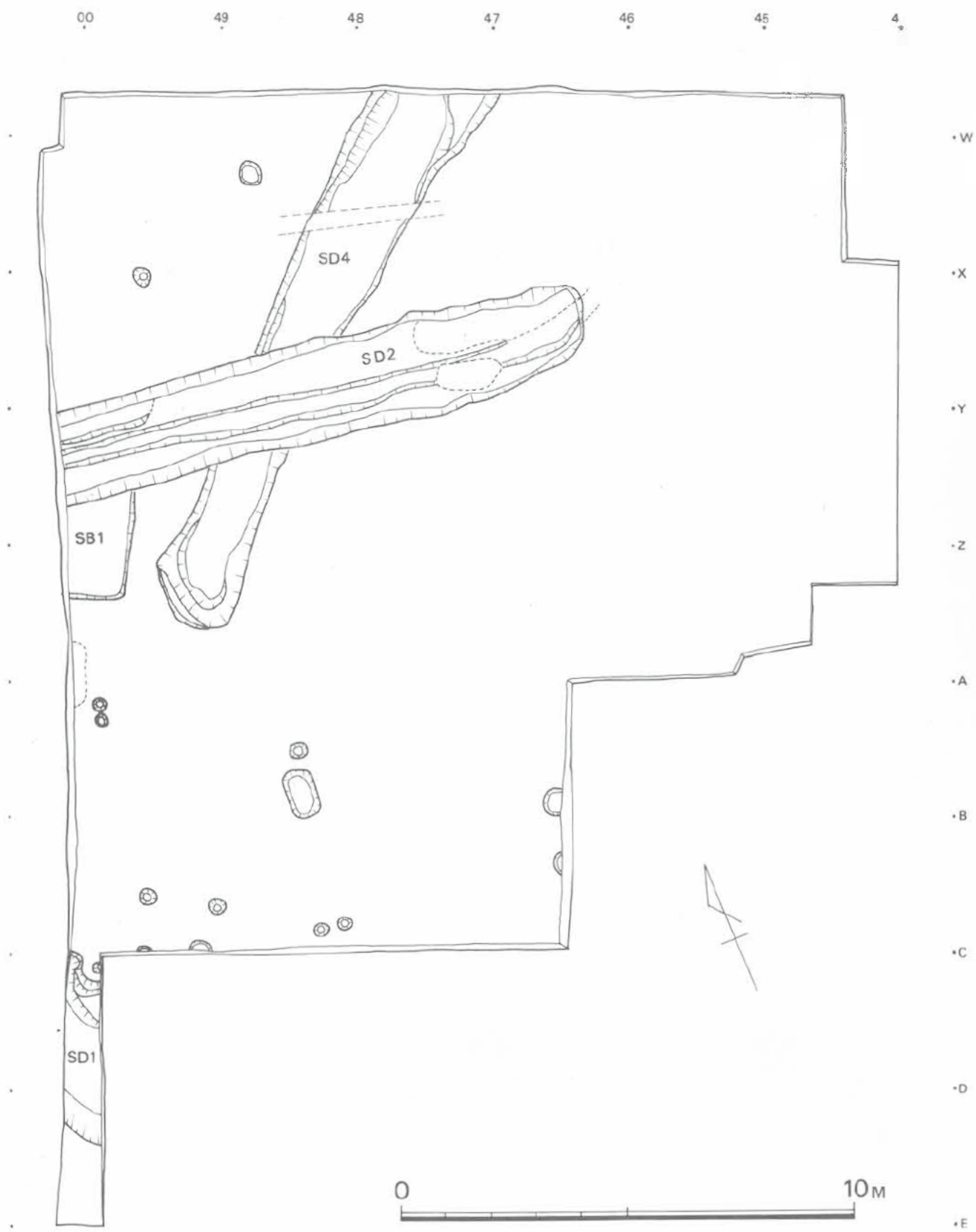
今回検出された部分の長さはわずか50cm余りで、溝内の状態は前回調査の通りである。しかし、遺物はかなり出土しており、前回出土した古宮遺跡の遺物に近似した土器は出土せず、須恵器と土師器(焼きしめ)だけの出土である。

SD2

発掘区中央よりやや北側に確認され、東西に走向し、前回調査と同じく方向はN-95°30'-Eを示している。検出された遺構の長さは約12m、幅約2m、深さ約0.5mを測る。幅・深さはほぼ全体的に同じであるがX-46近くで終っている。溝内はいくらか攪乱を受けており、遺物の出土はわずか須恵器1点を検出している。しかし、本来この溝に、伴ったものかは出土状態からかんがみ断定しがたく、流れ込みか攪乱時の混入かと思われる、この溝の年代決定資料にはなり得ないと考える。なお、底部に1本の細い溝が確



第20図 SD2出土須恵器実測(1/3)



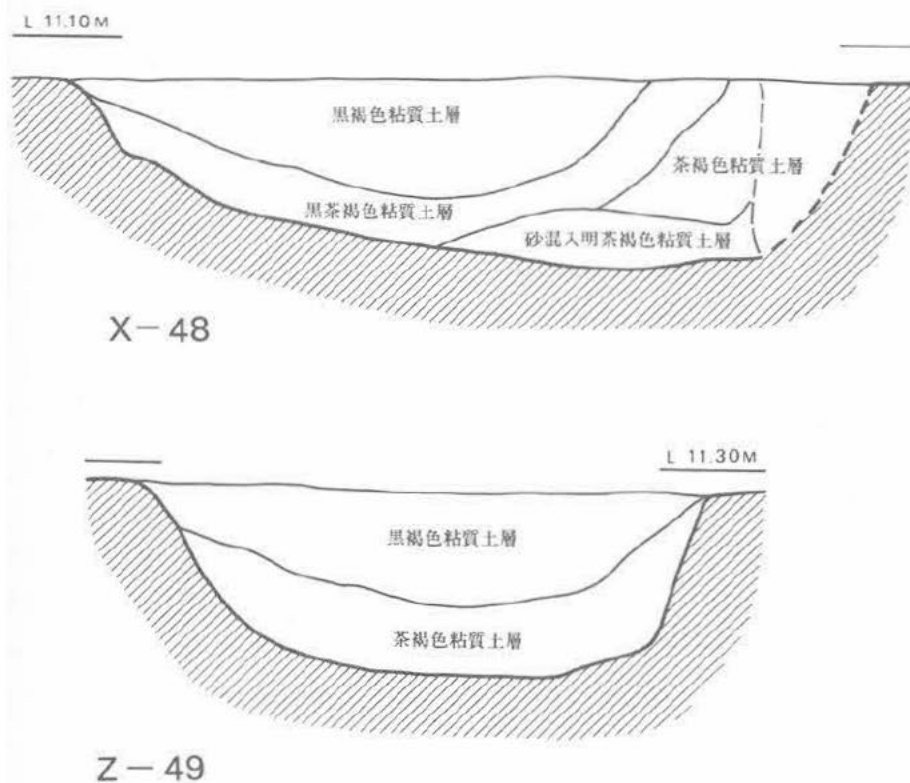
第21図 第3次調査遺構配置図 (1/20)

認されているが、前回と同じく新旧、および年代は不明である。あるいは、細い溝だけ北側に折れまがってのびていく可能性もあるが、水道管等の攪乱を受けている。

SD 4

発掘区の西北に位置し、SD 2に切られている。走向は東北—西南、方向はN-47°-Eを示している。検出された溝の長さは約13m、幅は南端近くで約1.5m、北端で約2.5m、深さは約0.5mを測る。最初、SD 1の北端とSD 4の南端が接しているのではないかと推定していたが、発掘が進むにつれ、完全に別の溝と確認された。溝の断面地層図によるとW-48の地点では、第1層は粘質黒褐色土で、第2層は粘質の黒茶褐色土、第3層は砂系粘質明茶褐色土を呈しており、自然堆積による埋土で、遺物の出土は第1層・2層に多く、第3層からはそれほど出土していない。Z-49の地点では、断面地層は2層に分けられ、第1層は粘質黒色土と粘質茶褐色土である。埋土は自然堆積によるもので、土器は第1層に集中していた。(第22図)

出土遺物は、SD 1の下層から出土した土器とほぼ同時期の土器片が検出されている。溝の成立はSD 1・SD 4とも同時期のものと考えられる。



第22図 SD 4 地層断面実測図 (1/50)

柱 穴

全部で13個確認されているが、拡散した状態で建物址になるような並びは検出できない。発掘区南側の高くなるところにいくらかのピットが現れてきており、南側未発掘区に多く存在しているものと思われる。

遺 物 の 概 要

SD1出土の土器

今回調査はわずか50cmであるが、遺物はかなり出土している。第2次調査で確認された最下層の層が確認されず、遺物も古宮遺跡と近似する土器は1点も検出せず、すべて須恵器と土師器（焼しめ）のみの出土であった。

硬質土師器とでもいえる土器と須恵器の器形・手法はほとんど共通しているが、同種の土師器は駕輿丁遺跡・塔ノ原廃寺・筑後国府東遺跡等で出土している。

須恵器

杯蓋

3類に分けられる。

I 類（第23図-1）

天井部に蛇ノ目のつまみを持つもので、いわば高台の形態を示すものである。区示した破片のつまみ径は6cm、高さは0.8cmを測る。外反して立ちあがり、外面先端はやや内湾して終る。内面には一段のくぼみを持たせている。また、つまみは削り出しによるものでなく貼付けている。色調は黒灰色を呈し、焼成・胎土とも良である。

II 類（第23図-2）

宝珠のつまみを持つ形態であるが、やや退化した形で、中央はやや窪んでいる。口径約13.7cm、器高2.3cmを測る。肩部から中心に向けて除々にくぼんでいる。色調は青灰色を呈し、外面の一部に自然灰釉がかかっている。焼成・胎土とも良質である。

III 類（第23図-3・4）

つまみを持たないもので、やや大きくなる。3は破片であるが、復元口径15.9cm、器高1.2cmを測る。天井部がたれて口縁部より下方に出てきている。4はかなり大きくなり、口径19.7cm、器高2.7cmを測る。口縁部はほぼ垂直におりてくるが、口縁部端で急に外反して終る。天井部は篋削りされ、口縁部端の外反している内側も篋削りされ、他はほとんど横ナデ・ナデ調整が施されている。

杯身

大きく高台の有無で2類される。

I 類（第23図-5・6）

高台が付かないもので、5の口径は14.4cm、器高3.4cmを測る。底部欠損しているが、ややくぼみ、口縁部は外反するように直立し、端でやや外湾している。6はやや歪みが生じており口径は約14cm～15cmで、器高は4.5cmを測る。口縁部は直線的だが、端でやや内湾する。5の色調は暗青灰色を呈し、胎土はやや砂粒を含むが良で、焼成も良。6の色調は茶褐色を呈し、焼成・胎土とも良。

II類(第23図-7・8・9)

7と8・9はやや器形は異なる。7の貼つけ高台は低い台形を呈したもので、8・9は外反した高台である。8は素直に「く」の字に折れ曲がり終っているが、9は先端でやや内湾気味となり、内面は一段くぼみを有している。

7の上半分は欠損し不明であるが、やや内湾しながら立ちあがるものと思われる。8・9とも内湾気味にふくらみを持っているが、口唇部でやや外反して終る。8の口径14.3cm、器高4.4cm、9の口径14.6cm、器高4.7cmを測る。7の高台高は0.5cm、8は0.8cm、9は0.8cm、径は8.4cm、10.3cm、11cmを測る。7の色調は茶褐色を呈し、胎土は良だが、焼成は不良。8の色調は淡青灰色を呈し、焼成・胎土とも良。9の色調は暗茶褐色を呈し、焼成・胎土とも良。

高杯(第23図-10)

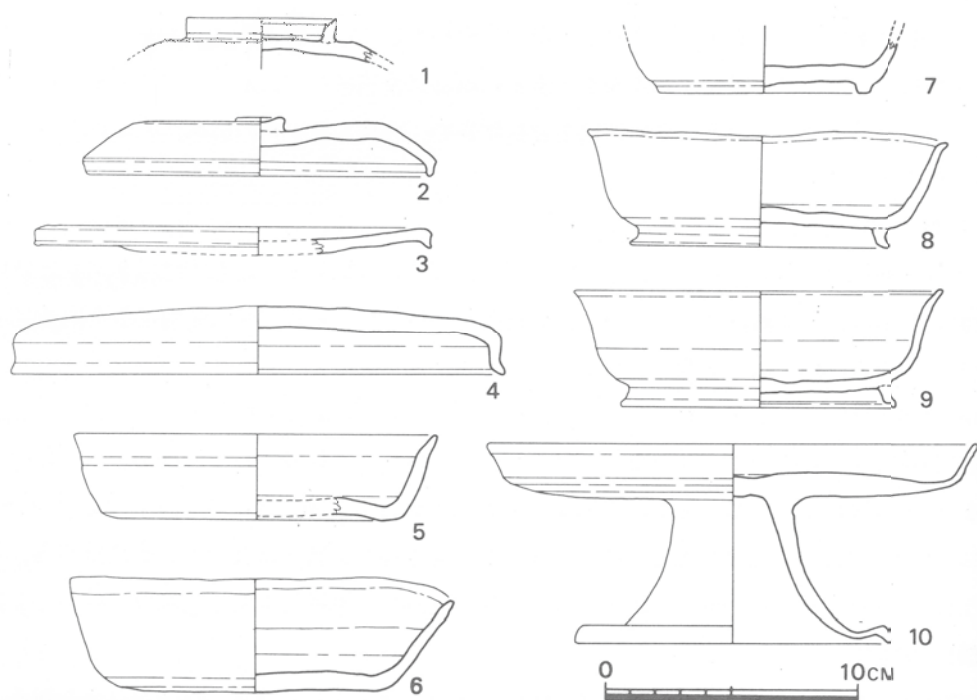
底部はかなりの厚味を持つが、口縁部の器壁はかなり薄くなっている。口径19.4cmを測る。脚裾径は12.5cmを測る。脚部は一部はね上がり、やや内湾して終る。脚部高は5.5cm、全体高7.9cmを測る。色調は乳灰色を呈し、焼成は不良。胎土は良。

土師器

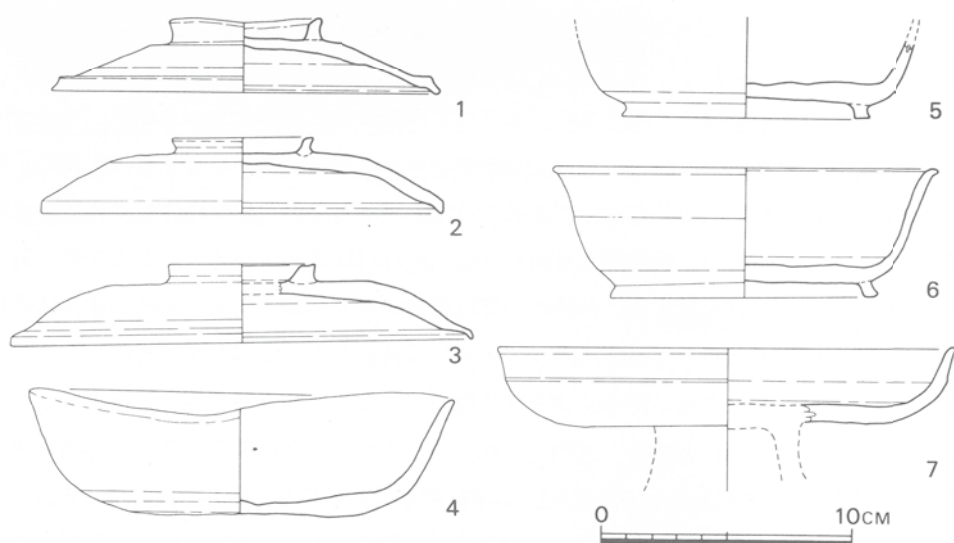
杯蓋(第24図-1・2・3)

すべて蛇ノ目のつまみを持つものである。1はつまみ径6cm、高さ0.8cmを測り、やや外湾気味に立ちあがり、先端内側は斜めにおさえられている。口径15.4cm、器高2.9cmを測る。肩部から口縁部に向け直線的にのびるが、口縁部の所で一度はね上がりやや外湾して終る。口縁部内側に一段のくぼみを持つ。天井部は篋削りされ、他はほぼ横ナデかナデによる調整が施されている。色調は灰茶褐色を呈する。外面の一部に自然灰釉が確認される。2のつまみは外反しながらのび、内面先端は斜めにおさえられている。器壁は全体的に同じ厚味でつくられている。口縁部は垂直に落ち、内面にややくぼみを持たせている。つまみ径5.6cm、高さ0.6cm、口径14cm、器高3cmを測る。天井部は篋削りされ、他はナデと横ナデ調整である。色調は黄褐色を呈する。3のつまみ径は5.8cm、高さ0.7cmを測る。天井部の一部を欠損している。つまみはやや外反しながら立ち上がり、先端はやや内湾して終る。上面は凹状を呈し、器壁もやや厚めである。体部はややふくら味を持ち口縁部に続くが、口縁部近くで段を持ち、外に開き終っている。体部の器壁に比べ、口縁部はかなり薄手に造り出されている。色調は黄褐色を呈す。

杯身



第23図 S D 1 出土遺物実測図① ($\frac{1}{3}$)



第24図 S D 1 出土遺物実測図② ($\frac{1}{3}$)

2類に分けられる。

I類(第24図-4)

高台を有しないもので、口径16.9cm、器高4.8cmを呈し、歪みを持っている。体部から口縁部まで開きながら直線的にのびる。底面は篋削りされ、他はほとんどナデか横ナデ調整である。色調は茶褐色を呈している。

II類(第24図-5・6)

5は口縁部を欠損している。高台径は9.9cmを測る。口縁部にいくにしたがい器壁は薄くなるようである。6の口径は15.4cm、器高5.2cmを測る。高台は「ハ」の字に開きしっかりとしている。高台径は11.6cmを測る。底部より体部の方が器壁は薄くなる。体部は、底部から丸味を持って立ち上がり、体部中ごろから外反し、口縁部はやや角度を持って外に折れる。色調は内面明黄褐色、外面淡茶褐色を呈している。

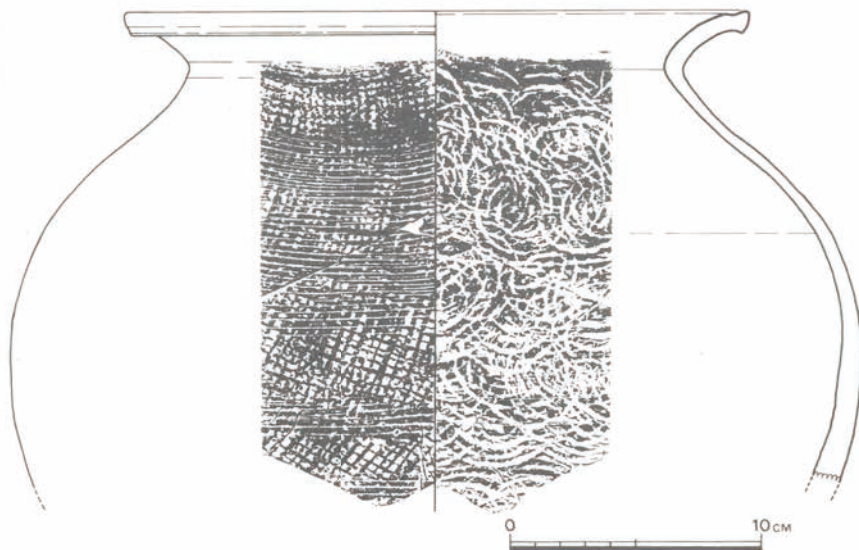
高杯(第24図-7)

脚部と杯底部を欠損している。体部は丸味を持つが、口縁部外面はやや外湾しながら終る。口径18.2cmを測る。色調は暗茶褐色を呈する。

壺(第25図)

口縁部から胴部までの破片である。口径24.8cm、残存高約19cm、胴部最大径33.8cm。肩部はやや薄くなり胴部に移行するにしたがい厚さを増している。

口縁部は「く」の字に折れ曲がり、内面はややふくらみを持ち、口唇部近くに凹を持たせている。胴部器表全面を叩きしめた後、全体的にカキ目調整を施す。内面の青海波文は、頸部の



第25図 S D 1 出土遺物実測図③ (1/3)

近くはなでられ消されているが、他はくっきりと残されている。

以上SD1出土の土器について記したが、第24図の土器は器形、調整の仕方など、かなり第23図の須恵器と類似しており、ただ色調の変化のみにて区別されえるもののようである。須恵器の焼き損じたものとしてではなく、明らかに赤焼きを意識したものと考えられ、須恵器ともなり難く、また土師器としても別の名称が必要かと思われる。

SD4出土の土器

SD2に切られている部分以外は、すべて溝の中央を中心に集中して遺物は検出された。器形には壺・甕・鉢・高杯等が出土している。

高杯形土器（第26図-1～7）

すべて脚部の破片のみである。脚の上面になにがくるのか明らかにしにくいものもある。4・5・6は高杯の形態をとるものと思われる。1は残存高5.2cmを測り、器壁は薄手につくられている。色調は黄褐色を呈し、外面はハケ目調整の跡もみられるが、内外ともへう磨きの痕跡もうかがえる。胎土はほぼ良。2は残存高5.7cm、裾幅11cmを測る。接合部から脚先端に向うにつれかなり薄くなっている。調整は磨耗が激しく不明である。色調は黄灰色、胎土・焼成ともほぼ良。3は残存高2.1cm、裾幅12.9cmを測る。器壁はかなり薄手である。色調は黄褐色を呈する。胎土・焼成ともほぼ良。1～3の上面には碗が付く可能性もある。4の残存高約3cm、裾幅13.6cmを測る。器壁はやや厚手で、先端は心もちね上げ平らにつくり出している。色調は黄褐色を呈する。胎土は砂粒を含むがきわめて細かい。焼成はほぼ良。5の残存高約3.5cmを測る。円筒状の脚部で裾部は急に折れ、小さく開くものと思われる。上面には複合口縁の杯が付く。表面はハケ目調整が施され、杯内面はナデによるとと思われる。脚部にはしぼり跡が残る。色調は黄灰色を呈する。胎土・焼成とも良。6の残存高は7.8cm、裾幅13.5cmを測る。他より高い高杯になると思われる。脚の円筒状は中空とならず柱状となり、中央あたりには円形透孔が3ヶ所に設けられている。器壁はやや薄手で、裾先端はやや外湾し、心もち持ち上げて終る。色調は黄褐色を呈する。胎土・焼成はほぼ良。7の残存高は5.6cm、裾幅16.2cmを測る。脚部上面の残在をみると、鉢か甕が付く可能性も考えられる。裾はかなり広がり、先端はやや外にふくらみ丸味を持って終っている。外面はへう磨きの後ハケ目調整を施していると思われる、内面もへう磨きされている。しぼり跡が観察される。色調は黄褐色を呈する。胎土・焼成とも良。

鉢形土器

大きく3類に分けられる。

I類（第27図-17～19）

小型丸底壺の可能性も考えられる。細かくみると各々異なっている点もあるが、口縁部はほ

ほぼ直立的にのび、先端は平らな面を持って終っている。17の口径11.5cm、器高12cm、胴部最大径13.6cmを測る。器壁はかなり薄く、外面はハケ目調整、内面はナデと指圧調整が施されている。色調は黄白色を呈す。18の口径13.5cm、胴部最大径16.5cmを測る。底部は急にちぢまる丸底になると思われる。口縁部は内湾しながら立上がる。外面ハケ目調整がうかがえるが、内面は不明である。色調は黄褐色を呈す。19の口径は16cmを測る。あるいは甕形土器の可能性もある。内面ハケ目調整を施しているが、外面は磨耗のため不明瞭である。

Ⅱ類（第27図－15・16・20～23、第28図－24・25）

細かくみるといくつかに分けられると思うが一括した。16は15の底部の形態を示すものではないかと思う。15の口径は11.7cmを測る。口縁部は肩から急に折れ、内湾しながら立ち、丸味をもって終る。器壁も薄い、器形も小さいものと思われる。外面ハケ目の痕跡があり、内面はナデによる調整が施されている。色調は黄褐色を呈す。20・21・24・25の口縁部は体部から急に折れ、短く外反する形態を示す。器壁は23は薄く、他は厚手のようである。23・24には外面にタタキ目が確認される。23の口径14.4cmを測る。口縁部はやや内湾しつつ立あがり、先端近くは厚味を増し、丸味をもって終っている。色調は暗褐色を呈す。21は内外ともハケ目調整が施されている。24の口径は15cmを測る。体部より口縁部の器壁が厚味をもつ。土師器的様相を呈している。色調は外面黒褐色、内面黄褐色を呈す。22・23は同形と思われる。外面はハケ目と下半分にタタキ目とナデによる調整が施されている。内面は上半分にハケ目調整、下半分にナデおよび指圧調整が施されている。口径14cmと14.4cm、器高15.6cmと16cm、胴部最大幅14.7cmと14.6cmを測る。口縁部は肩から急に直線的に外反し丸味をもって終る。23の方がやや器壁は厚手である。22は底部欠損しているが、特異な形態を示している。また、粘土帯の継ぎ目が明瞭である。色調は暗黄褐色から黄褐色を呈す。

Ⅲ類（第30図－42）

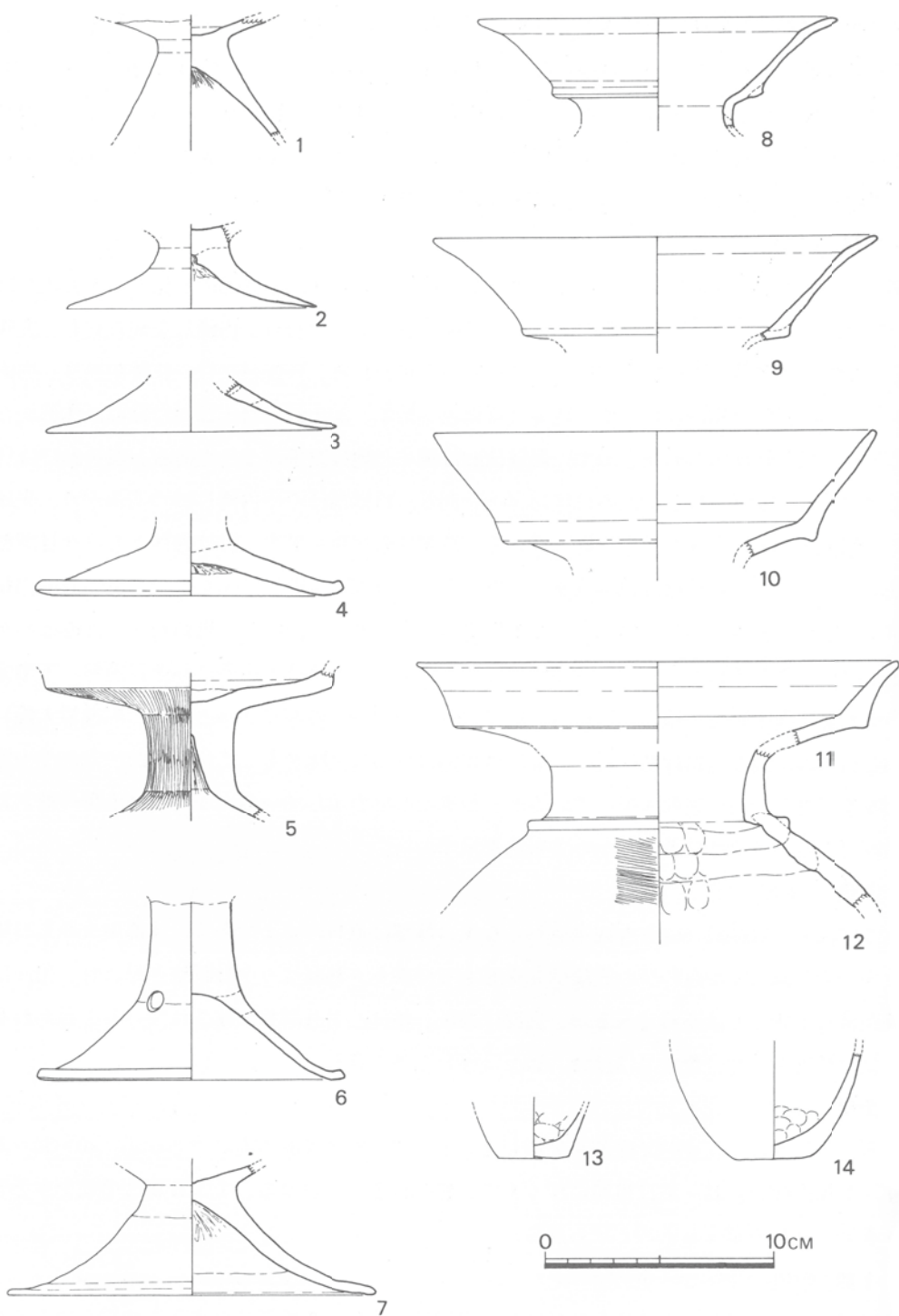
高さ12.4cm、口径22.6cmの丸底半球形をなす口縁部は直口のままである。体部中央から口縁端までやや内湾しながらのび、先端は丸味をもって終る。外面はハケ目調整と思われ、内面は磨耗が激しく詳しくは不明であるが、底部は指圧、他はハケ目調整が施されていると思われる。色調は暗褐色を呈し、焼成はほぼ良。胎土は砂粒を多く含む。

甕形土器

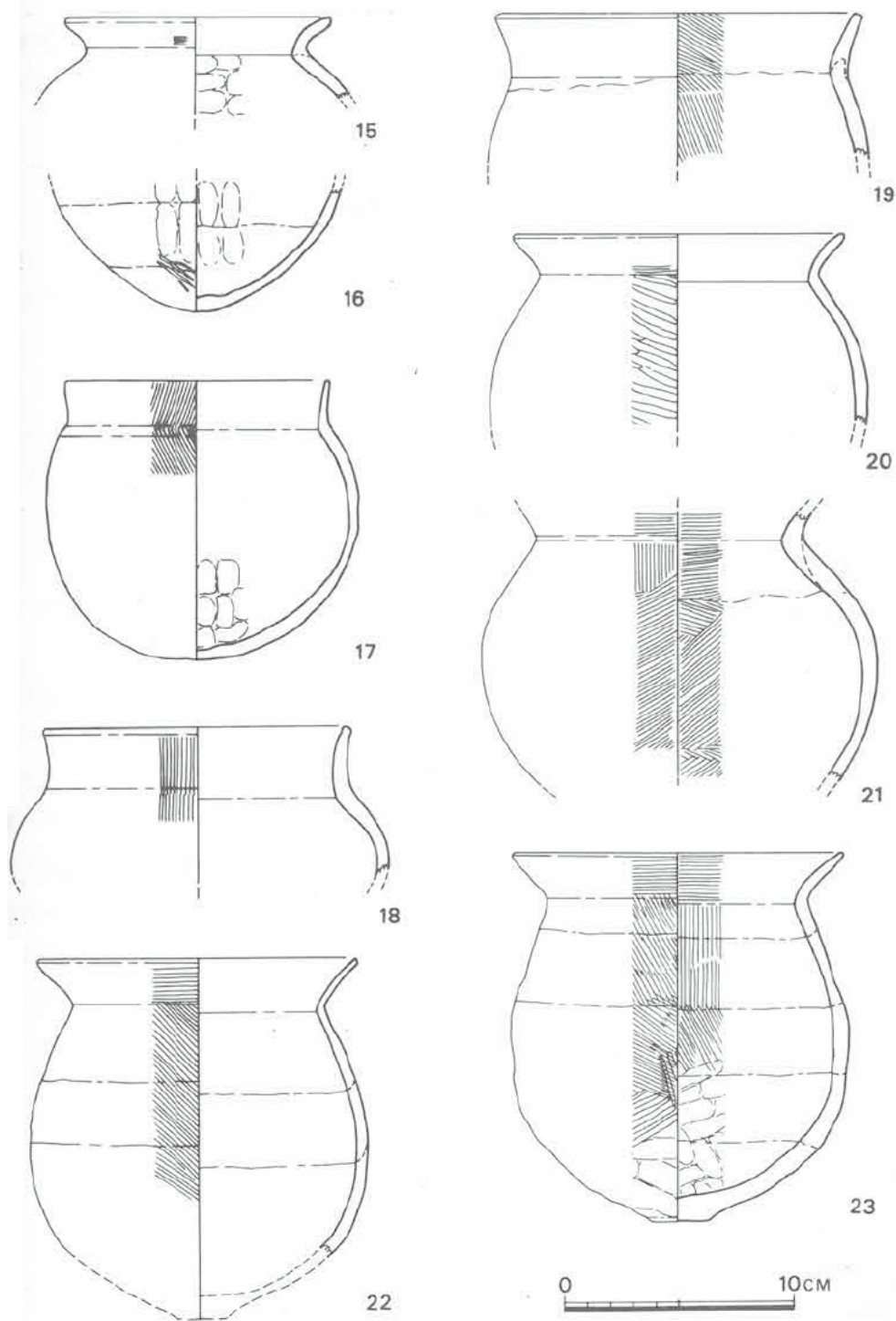
大きく4類される。すべて底部を欠損している。30～35は底部の実測であるが、30・32～34はⅠ・Ⅱ類に伴い、31・35はⅢ類に伴うものと思われる。いわゆる、Ⅰ・Ⅱ類は平底を主とし、Ⅲ・Ⅳ類は丸底を呈するものと思われる。

Ⅰ類（第28図－26～29・第29図－40）

27以外はすべて肩からゆるやかに外反し、直線的にのび、先端部はおさえられ平らになる短い口縁部を付している。胴部のふくらみも口径とはほぼ同大であると思われる。外面にタタキ目



第26図 S D 4 出土遺物実測図① ($\frac{1}{3}$)



第27図 S D 4 出土遺物実測図② (1/3)

のあるものとなないものがある。

26の口径は16cmを測る。口縁部は肩からゆるやかに内湾しながら立あがる。色調は灰黄褐色を呈す。胎土は砂粒を含み、焼成はやや不良。27の口径は17.4cm、くびれ径は12.8cmを測り、よく頸がしまっている。口縁部は角度のある「く」の字を呈し、やや外湾しながら先端へとつづく。先端部は押さえられ外唇部はわずかに下方にたれている。口縁部外面はハケ目調整、体部はタタキ目調整が施されているが、内面は磨耗のため不明である。色調は黄褐色を呈す。28・29は同形を呈すが、口径は18.6cm、19.6cmで29の方がやや大きめで、28は内外ともハケ目調整であるが、29は外面タタキ目調整である。色調は明褐色と淡黄褐色を呈す。40の口径は24cm、くびれ部径は19.1cmを測る。口縁部は外反しながら直線的にのび、先端近くでやや厚味をもち、丸味をもって終っている。内面くびれ部には弱い角を有する。体部はあまりふくらみをもたずに底部につづくものと思われる。外面は、磨耗が著しいが、体部にタタキ目の調整、内面はハケ目調整が施されている。色調は外面黒褐色、内面黄褐色を呈している。胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。

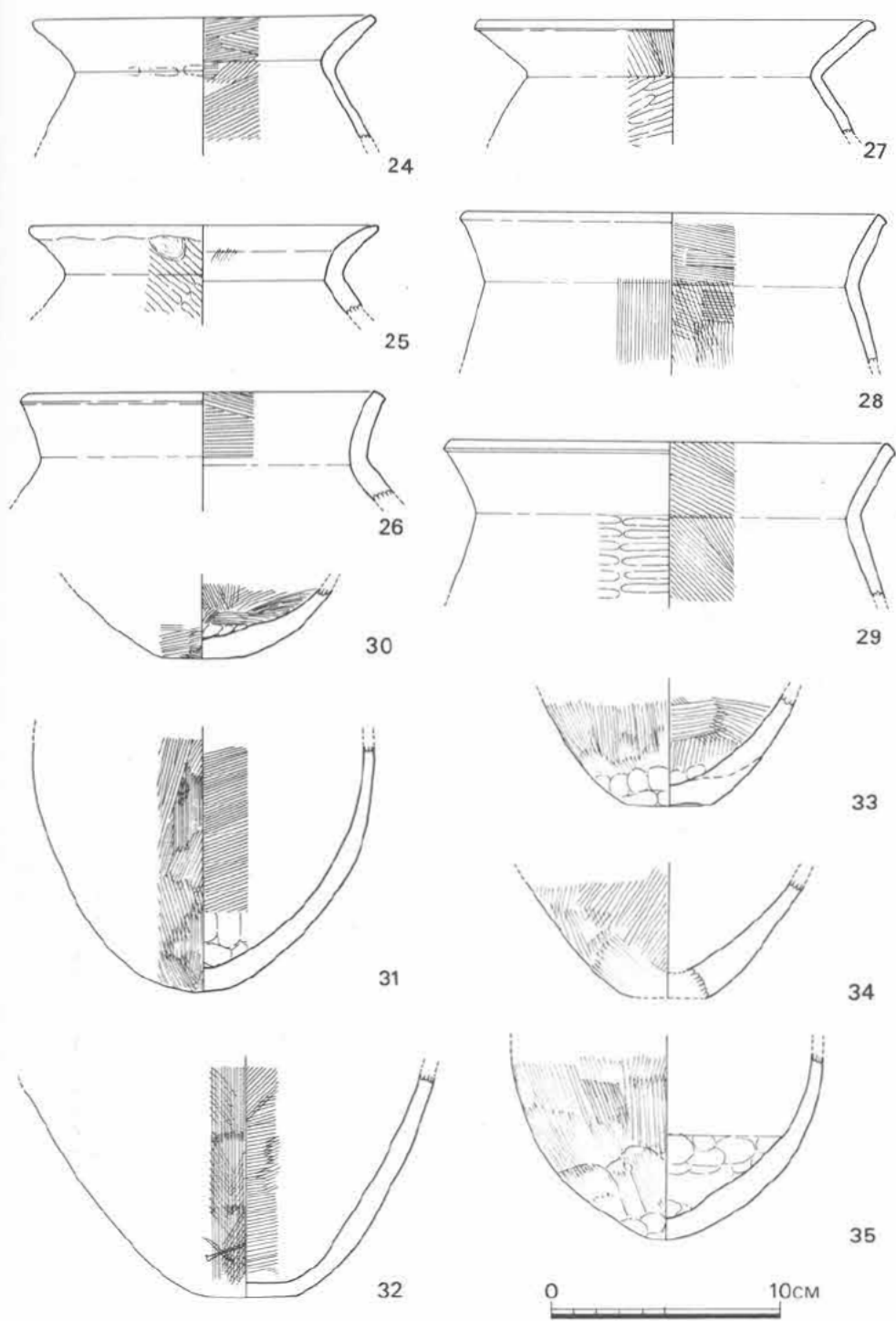
II類 (第29図-36-39)

口縁部が肩から内湾しながら強く外傾し短く、先端はやや丸味をもって終る。外面はタタキ目調整、内面はハケ目調整が施されている。

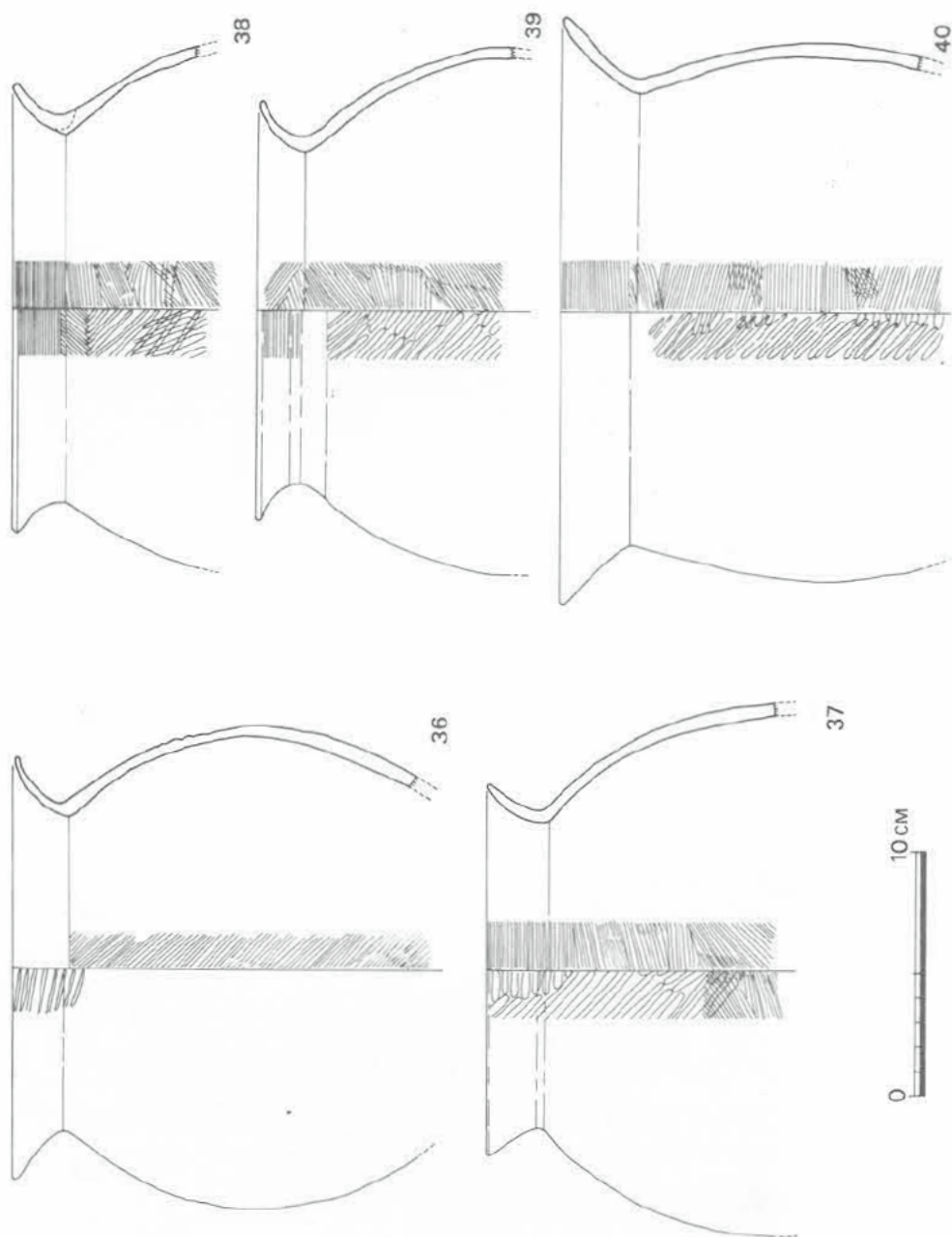
36の口径は17.4cm、くびれ径は17.4cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反しながら折れ曲がり、内面先端は斜めに削られ、体部と口縁部の接点に強い角をもつ。外面は横と斜めのタタキ目調整が施され、内面はハケ目調整である。色調は黄褐色を呈し、焼成・胎土ともほぼ良である。37の口径15.2cm、くびれ径は13.2cmを測る。口縁部は外反しながら直線的にのび、先端は丸味をもって終る。内面の体部と口縁部の接点に角を持つ。外面は口縁部から体部にかけてタタキ目が施されているが、一部ハケによる調整も施されている。内面はハケ目調整。色調は黄褐色を呈す。38は口径18.4cm、くびれ径15.9cmを測る。口縁部は外湾しながらのび、先端は平らな面を持って終る。内面くびれ部に角を持つ。外面口縁部はハケ目調整であるが、体部はタタキによる調整が施されている。内面はハケ目調整。色調は明黄灰色を呈す。焼成はやや不良であるが、胎土は良。39の口径は17.2cm、くびれ径14.2cmを測る。口縁部はかなり強く外湾し、先端はやや丸味を持って終る。内面くびれ部に角を持つ。外面口縁部はハケ目、体部はタタキ目による調整が施されている。内面はハケ目調整による。色調は黄灰褐色を呈し、焼成・胎土ともほぼ良である。

III類 (第30図-41)

胴長で丸底を呈し、短く外反する口縁部がつくもので、口縁部はややゆがみを持っている。口縁径は約13.4cm、器高24.5cmを測る。器壁は口縁部から体部中央までほぼ同じであるが、底に近づくにつれ薄くなり、底はやや厚めとなる。口縁部はややゆるやかなカーブで外反し、先



第28図 SD 4 出土遺物実測図③ (1/3)



第29図 S D 4 出土物実測図④ (1/3)

端は丸味を持って終る。外・内面ともハケ目調整であるが、内面底部近くは指ナデ調整が施されている。

IV類(第31図)

大甕で2は口縁部のみを図示した。体部と口縁部の接点に1条の貼り付け突帯が施されている。伴に口縁部は『く』の字状を示している。1の突帯は台形、2は山形断面を呈し、前者はタタキ目を直横に走り、後者は頂部に1条の沈線を施し、ハケ目調整である。1の口縁部及び体部にはタタキ目を施し、その上から1部ハケ目調整されている。内面はハケ目調整である。また粘土帯のつなぎ目が明瞭に認められ、他はハケ目調整である。内面はハケ目調整である。

1の口径69cmを測り、色調は淡黄褐色から黒灰色を呈し、焼成はやや不良。胎土には多くの砂粒を含んでいる。2の色調は黄褐色を呈し、焼成・胎土は1とはほぼ同様である。

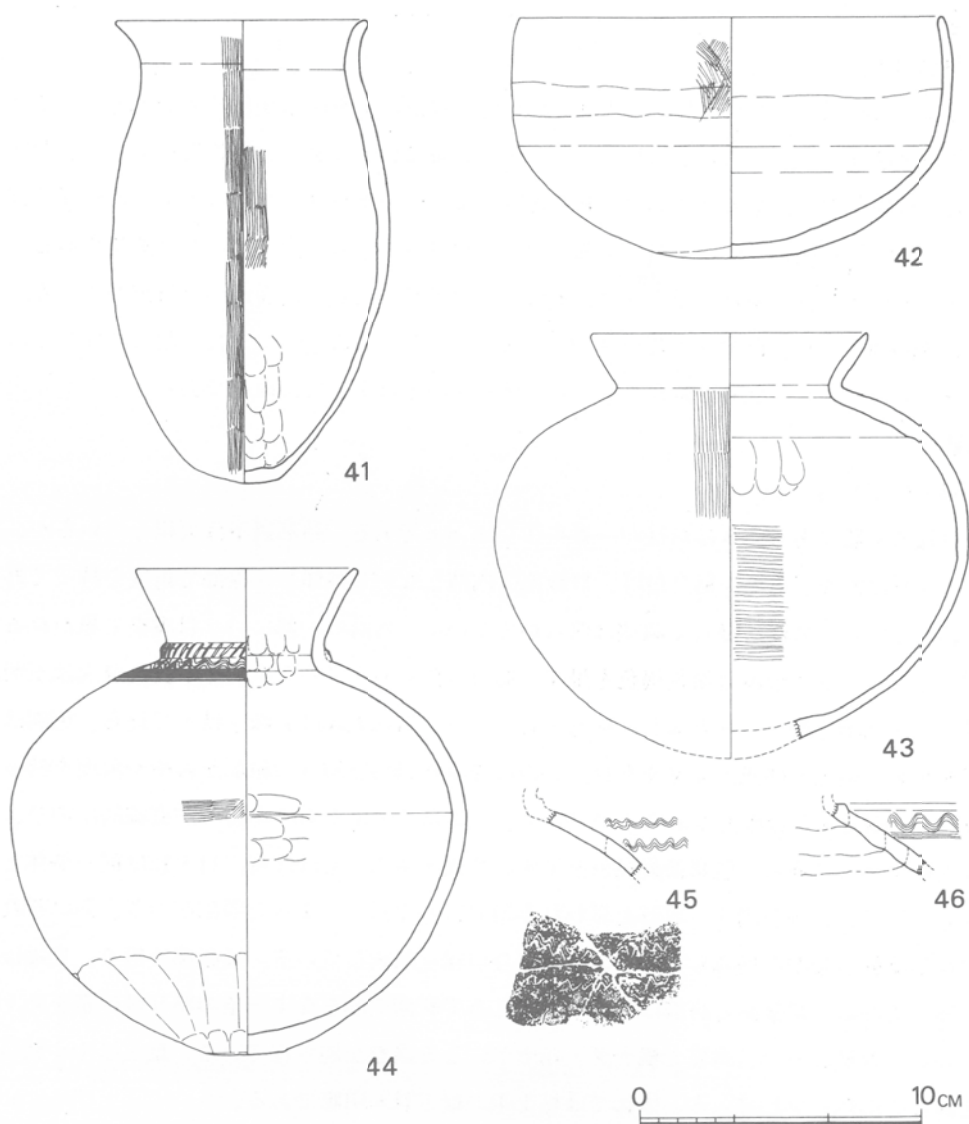
壺形土器

I類(第26図-8~12)

複合口縁の土器である。8は口径が一番小さく15.8cmである。頸部以下は欠損しているが、口縁部下半分に断面三角形が貼り付け、口縁部は内湾しながら外傾し、端部で角度を持って外に折れ終っている。磨耗が激しく調整は明らかでないが、外面の一部にハケ目調整と思われる痕跡がみとめられる。色調は淡黄褐色を呈す。胎土は砂粒石を多く含みやや不良。焼成は不明。9の口径は19.5cmを測る。8と同じ形態を示している。口縁先端は丸味を持って終る。色調は明黄色を呈す。胎土・焼成ともやや不良。10の口径は19.4cmを測る。頸部からやや角度を持って外反し、上端で再び反転しながらのびていく。上端はややふくらみを持つが直線的にのび、先端は丸味を持って終る。色調は黄褐色を呈す。焼成・胎土ともほぼ良。11・12は同一個体と思われる。口径21.2cmを測る。球形と思われる胴部にやや短くしまった頸部がつき、急に折れ、上端で再び反転しながら内湾して、いわゆる複合口縁を形成している。反転部は短く、先端は丸味を持って終る。頸部から肩部に移行するところで断面山形をなす一条の貼り付け帯をめぐらしている。器壁にハケ目調整と横ナデ・指ナデによる調整が施されている。焼成はやや軟質で、色調は赤褐色を呈している。体部では粘土帯の継ぎ目が明瞭である。

II類(第30図-43)

高さや口径に比べて胴径が著しく大きな一種の扁球形を成し、頸部がなく肩から急に短く外反する口縁部が付いている。口径14.6cm、くびれ径12cm、胴部最大径25.3cmを測る。底部は欠損している。胴部最大径は体部のほぼ中央にあたる。かなりの扁球形を呈し、口縁部は肩部から急に外反し、ほぼ直線的にのび、先端はやや内湾している。体部には何らの装飾はなされていない。外面はハケ目調整、内面はナデとハケ目調整がうかがえる。色調は乳黄褐色を呈す。胎土には砂粒を含み、焼成はやや不良である。

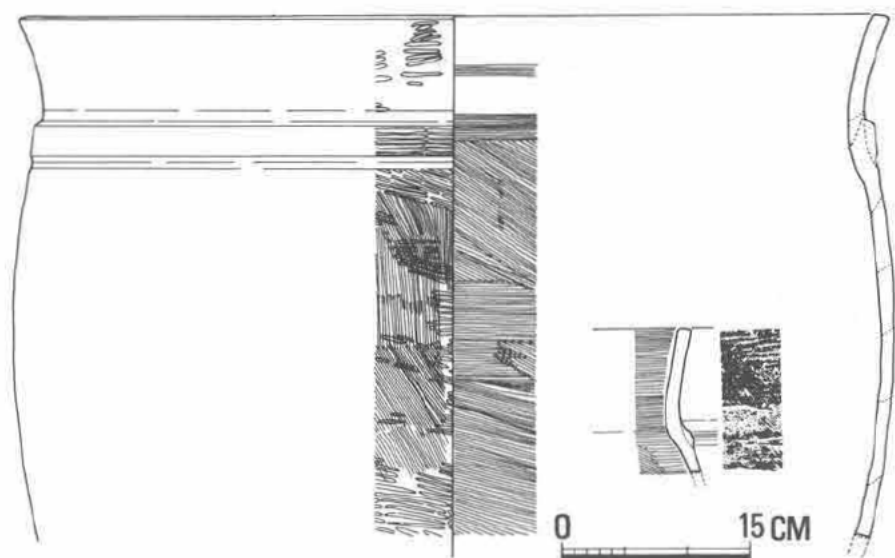


第30図 S D 4 出土遺物実測図⑤ (1/4)

Ⅲ類 (第30図-44~46)

Ⅱ類と同じく一種の扁球形を呈しているが、Ⅱ類よりやや長目の口縁部がつき、突帯や装飾が施されている。

44の口径11.9cm、くびれ径9cm、胴部最大径24.4cmを測る。肩から口縁部に移る所に断面三角形の突帯が一状めぐり、きざみ目が施され、直下の肩の部分に4条の櫛目波状文と6条の櫛描沈線が施されている。表面がかなり磨耗していて著しい調整は不明であるが、外面に一部ハ



第31図 SD 4 出土遺物実測図⑥ (1/6)

ケ目調整がうかがえ、内面の口縁部と体部の接点付近と体部中央にナデによる調整がうかがえる。なお、底部近くはへう削りによる調整がなされている。色調は暗黄褐色を呈す。胎土はかなりの砂粒を含み、焼成はやや不良である。45・46は壺の肩部の破片で、ともに櫛目波状文および櫛描沈線が施されている。45は、上下に3条を一つの単位として櫛目波状文が描かれ、46は、4条の櫛目波状文と4本の櫛描沈線が施されている。45・46とも色調は赤褐色を呈し、焼成はやや不良である。

櫛描沈線文と櫛目波状文が描かれている壺は、筑後市孤塚遺跡の住居址内から出土している。そこで出土した土器を3つの時期に編年され、Ⅰ期・Ⅱ期は弥生終末に、Ⅲ期を土師Ⅰ期に比定されている。櫛目波状文および櫛描沈線文が施されている土器は、第Ⅱ期の後半に考えられている。それに伴う壺として、肩に断面三角形の突帯が一条めぐり、口縁端は平らになり、刻目が施されているものが出土している。今回出土した土器は、櫛目波状文と櫛描沈線文が施されている直上に、断面三角形の突帯が付せられ、口縁部は短く外に折れ、先端は丸味を持って終っている。胴部最大径は体部のほぼ中央にあり、胴長の形態を呈していない。このような点からかんがみ、櫛目波状文が描かれている孤塚遺跡出土の土器より、今回出土の土器はやや時期的に下るものと思われる。

手捏ね土器（第26図-13・14）

13・14とも平底で、内外とも指で調整しているが、仕上げがよく、14の外表面はへう磨きを施し、いわゆる手捏ね土器とは趣を少しく異にしている。13の色調は赤褐色、14は内面黒灰色、外面淡黄褐色を呈している。

小 結

今回の調査地点は、第2次調査地点のすぐ東にあたり、連続した遺構が多かった。

SD1・SD2・SB1は前回確認されていた遺構の連続で、SD4とピットが今回新たに追加される遺構である。

SD1出土遺物の状態を第2次調査でみると、土層は3層に分かれ、第1層と第3層に遺物が集中していることが示されている。第1層の遺物と第2層の遺物は、時期が異なっていることは前記のとおりである。第3次調査の出土遺物は、第1層の遺物と同時期のものであり、第3層が確認されず、南にいくにしたがい、レベルがわずかずつ高くなっている。

第3次調査の遺物は、須恵器と土師器のみである。土師器は須恵器の形態手法をとりながらも赤焼きされ、第2次調査地点のSK3出土の土器や東遺跡出土の土器に類似している。時期的には奈良期のものと思われ、SD1の時期は、第3層の弥生終末期と奈良期の異なった2時期が推定され得る。

SD2は、当初国府城の北限を示すものと考えられていたが、第3次調査地点のX-46でそれは終っていた。もし、SD2を北限線とするならば、X-46以東にも何らかの痕跡が残っているか、あるいはもっと溝がのびていてもよい筈だと考える。しかし、今後なおこれは検討する必要があるだろう。成立時期については検討すべき遺物も出土しておらず、わずか一点の須恵器を検出したにすぎない。その割れ口からみると新しく、溝底より数センチ浮いた状態で出土している。また攪乱されている近くで、流れ込みの可能性もあることから、年代決定資料になりえないことは前記したとおりである。

SD4は、上面が削平されて、ほぼ直線的に南北にのびている。前記のSD2と一部分において切り合っているが、SD4がSD2によって切られている状態が観察できる。遺物は、上面、底面いずれからもちかなり出土したが、第1層の下面にほぼ集中している。

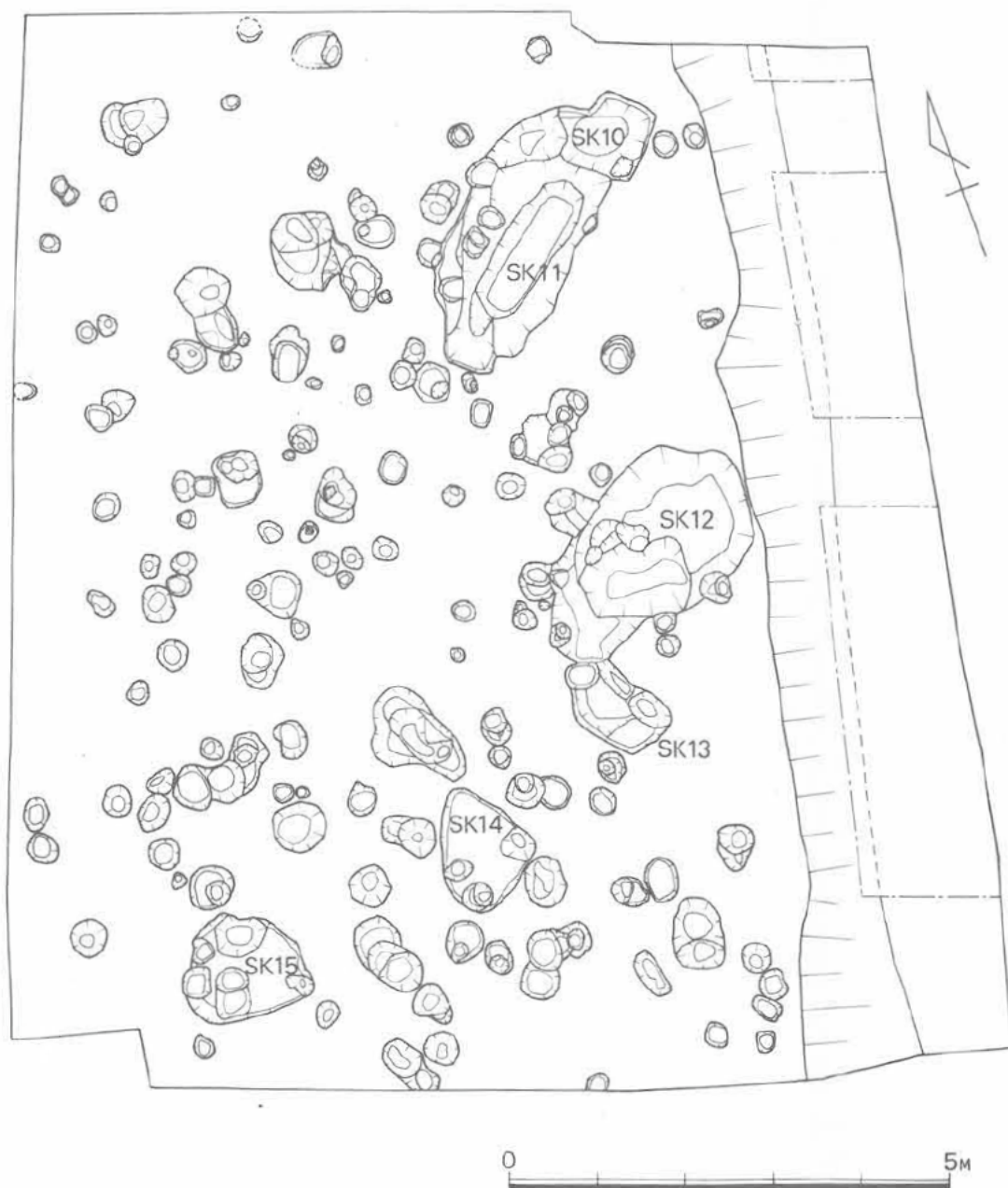
遺物は、底面上から出土した土器で図示したものは、第27図-15の鉢形土器・第30図-41の砲弾形甕・第31図の甕形土器等であるが、他の大部分は底面より浮いた状態で出土している。これらの遺物は、SD1や古宮遺跡出土の遺物と類似し、細かく観察すると、いくつかの時期に細分されると思われるが、SD4の成立時期は弥生終末頃に比定しておきたい。したがってSD1と同時期に存在していたことになり、SD1とSD4と何らかの関係があると思われるが、住居をとりまく溝にしては、現在検出されている住居址を考え合わせると、逆の方向に曲線を描くことになる。そのような点から環状の溝にはなりがたく、また別な性格を考えなければならぬと思われるが、今回それを明らかにすることはできなかった。

最後に、SD4出土の土器については、今後古宮遺跡出土の土器や孤塚遺跡あるいは高島遺跡出土の土器等と詳しく比較検討すべき多くの問題を含んでいるが、その中で、SD4出土の土器が最古式の土師器となる可能性が強いことも付記しておきたい。

(萩原)



第32図 第2次・第3次調査遺構配置図 (1/100)



第33図 第4次調査遺構配置図 (1/60)

4. 第 4 次 調 査

第4次調査は、合川小学校の東門の脇にあり、校舎増築工事に先がけて緊急調査を行なったものである。本地点は、字御蔵園の東南部にあり、枝光台地の東北端に位置する。また、水田をはさんで和泉の台地に相対している。調査面積は約110㎡で、包含層はすでに失われ、地表下約50cmで遺構面（地山面）に達する。発掘区の東側に南北方向の落ちを検出したが、埋土及び、出土遺物により近代における採土の跡と推定された。また発掘区の北・西側の一部は側溝等によって攪乱されていたが、全般的にみて、遺構の残存は予想外に良好であった。

遺 構 の 概 要

発掘区の東側は、近代における土取りがなされており、遺構は残存していなかったが、他の部分では、全面にわたって各種の遺構を検出した。主なものは、土壇・掘立柱建物址・柱穴である。

土 壇（第33図）

発掘区域の東北部から西南部にかけて、6基の土壇を検出した。いずれの土壇も不整形を呈しており、性格も不明である。

S K 10（第34図）

発掘区域の東北部に検出された東西約110cm、南北約90cmの土壇である。深さは約20cmと浅い。遺物は土師器の細片少量を出土しただけであった。S K 11の北端を切り込んでいる。

S K 11（第34図）

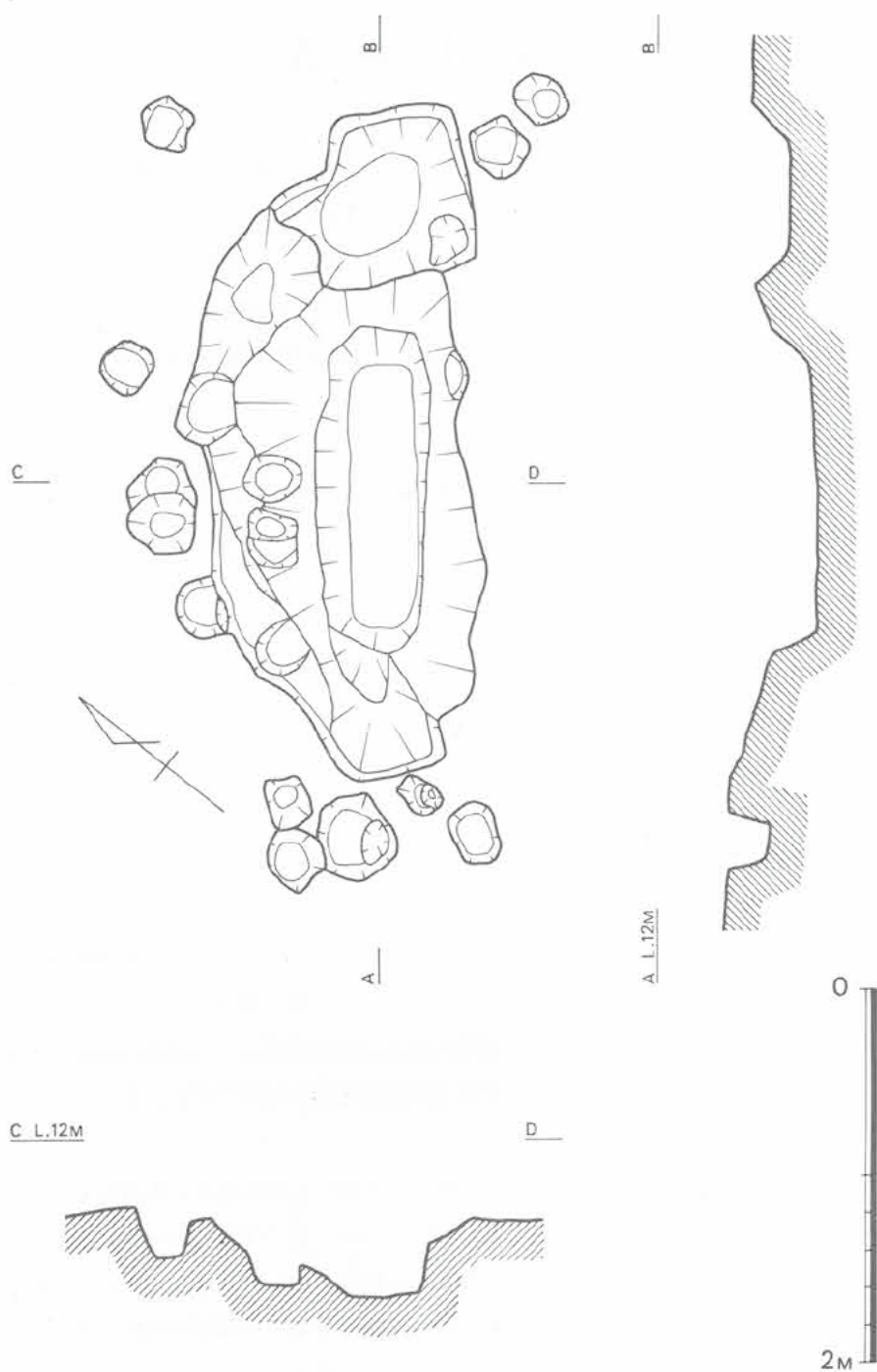
S K 10の南側に S K 10に切られた状態で検出された。東西約140cm、南北約265cm、深さ約55cmを測る不整長方形を呈する。壇底に200cm×60cmの長方形の掘込みがあり、土壇墓かと思われるが、明らかでない。S K 10と同様、遺物の出土は皆無に等しく、時期の決定は不可能であるが、柱穴のいくつかと重複しており、柱穴より時期は古いものと考えられる。

S K 12（第35図）

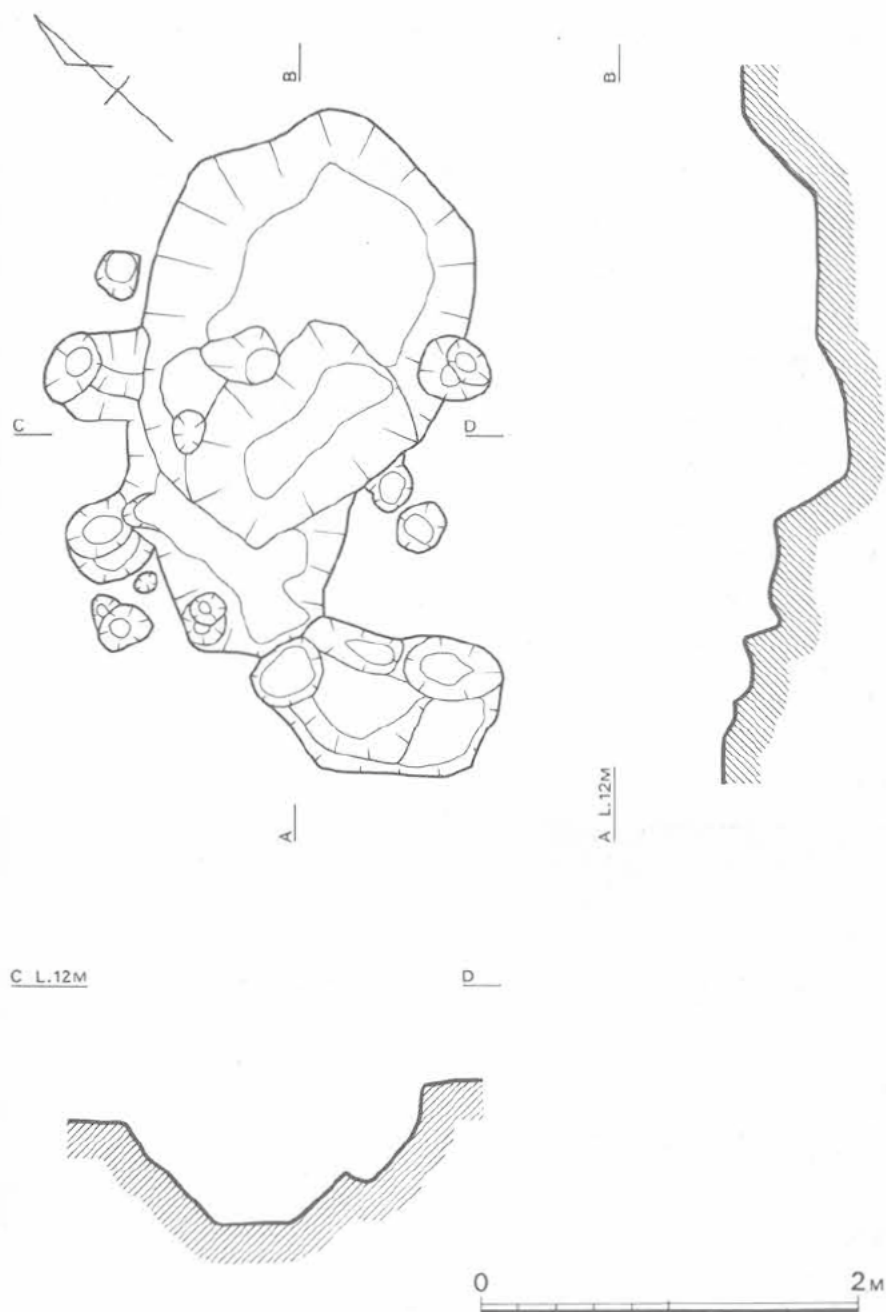
発掘区中央部東側に検出され、中央部に深い掘込みを持つ土壇である。東西約170cm、南北約210cmを測る。深さは最深部で約64cm、北に深さ約46cm、南に深さ約28cmを呈する不整形の土壇である。平面では3つの土壇が切り合ったように観察されるが、断面で検討した結果では一つの不整長方形の土壇としてとらえられる。出土遺物は少なく、時期や性格は不明であるが、奈良期の遺物を出土した柱穴に切られているところから、柱穴に先行することが考えられる。

S K 13（第35図）

S K 12の南に接して土壇 S K 13を検出した。東西約120cm、南北約80cm、深さ約18cmを測る



第34図 S K 10・11遺構実測図 (1/40)



第35図 SK12・13遺構実測図 (1/40)

不整形長方形を呈する。出土遺物は須恵器・土師器片がみられる。

SK14 (第33図)

発掘区南側中央部に土坑SK14を検出した。東西約110cm、南北約150cm、深さ約15cmの不整形を呈する。柱穴に切られており、土師器・須恵器片を出土している。

SK15 (第33図)

SK14の西側約2mの地点に検出された。東西約140cm、南北約120cm、深さ約30cmを測る不整形の土坑であり、SB15の柱穴によって切られている。土坑内にはピットが数個確認されたが、SB15の柱穴以外は、土坑に付随するものかどうかは不明である。遺物は土師器・須恵器片を出土した。

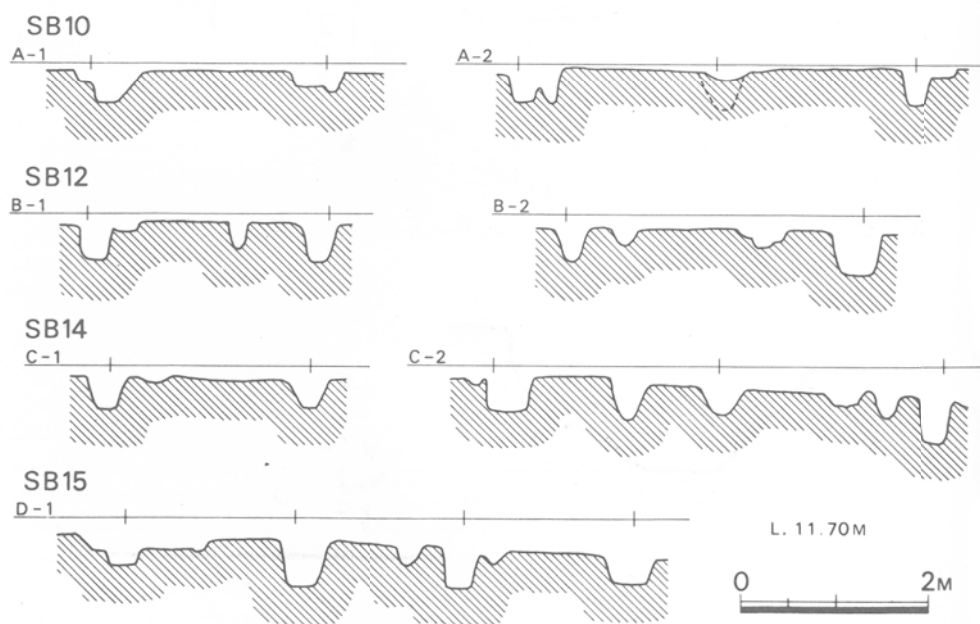
掘立柱建物址

全面にわたり約180個ほどの柱穴(ピット)を検出した。そのうち、掘立柱建物址としてまとまるのが6棟あるが、柱間の関係から建物址として考えるのには、まだ考察しなければならない面もある。

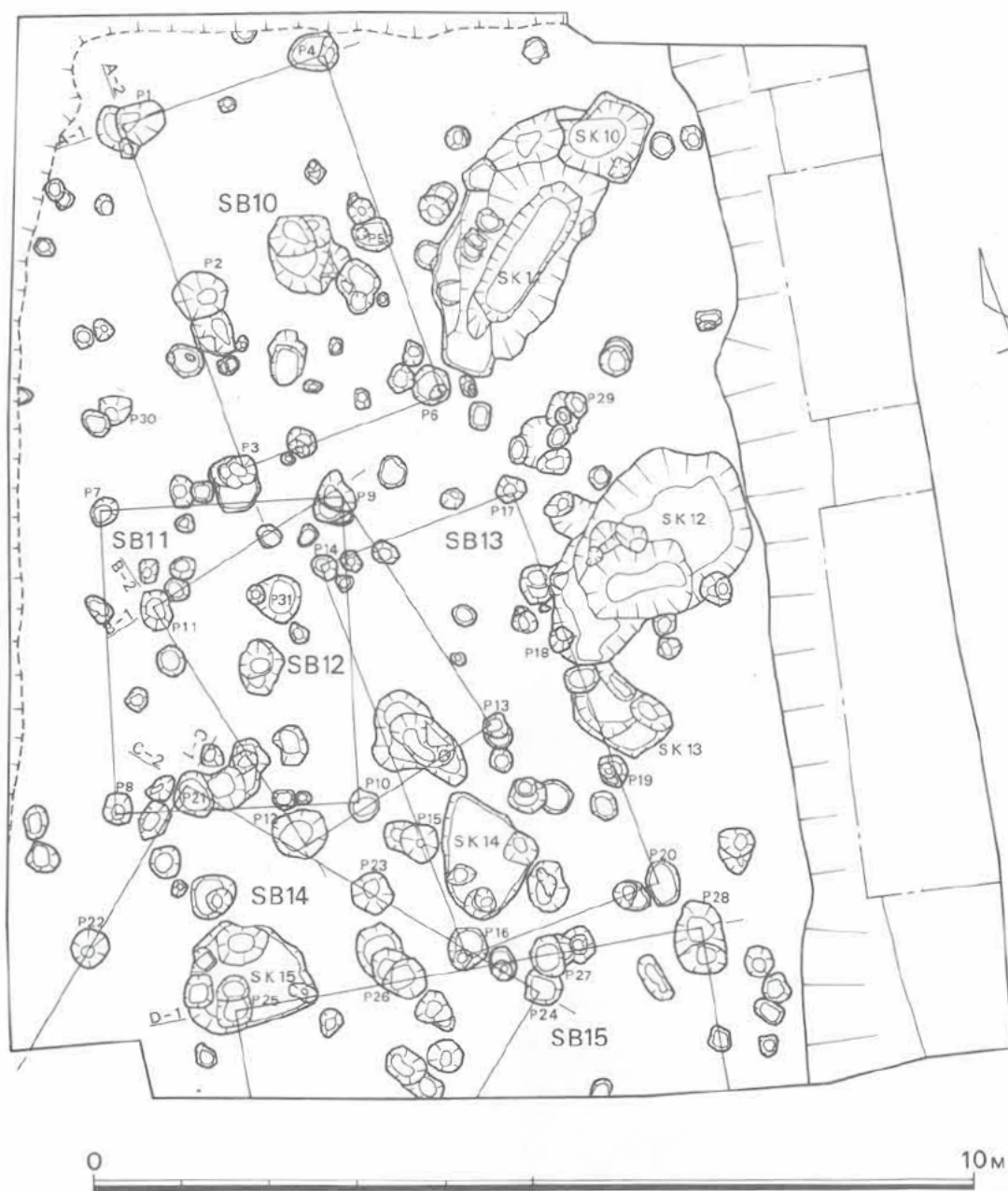
SB10 (第36・37図)

発掘区の北東部に検出された。南北棟1間×2間の建物址である。桁行約3.1m、梁行約2.4mを測るが、桁行の柱間より梁行の柱間の方が長い。棟方向は、N-6°-Eを示している。

SB11 (第36・37図)



第36図 掘立柱建物址断面図 (1/60)



第37図 独立柱建物址遺構配置図 (1/50)

発掘区の中央部西側に位置している。南北棟1間×1間の建物址である。桁行約3.4 m、梁行約2.7 mを測り、ピット9には根石を敷いている。桁行の柱間の距離が長いことから、少々疑問の点もみられる。棟方向は、N-16.7°-Eを呈する。

SB12 (第36・37図)

発掘区の中央部西側に位置している。南北棟1間×1間の建物址である。桁行約3.2 m、梁行約2.5 mを測り、棟方向は、N-13°-Wを示している。この建物址は、SB11をピット9を軸に移動したようなもので、また柱間の関係から疑問の点が多い。

SB13 (第36図)

発掘区の中央部に位置している。南北棟1間×3間の建物址である。桁行約4.7 m、梁行約2.4 mを測り、棟方向はN-1.5°-Wを示している。

SB14 (第36・37図)

発掘区の西南端に位置しており、一部分だけの検出であったので全体の規模は不明である。規模は2間×2間以上で、東西軸は約4.6 mを測り、N-40°-Wを示している。

SB15 (第36・37図)

発掘区の南端に位置し、一部発掘区域外になり、全体の規模は不明である。規模は3間×2間以上で、東西軸は約5.4 mを測り、方向はN-80°-Wを示している。

以上各掘立柱建物の概略を述べてきたが、建物址としての条件を十分に満足できるものは少なく、もっと研究の余地が十分あると思われる。なお、各々の柱間の距離は表の通りである。

その他の柱穴

平面図の上では上記の6棟の他、数棟にまとまりそうな柱穴群があるが、深さ及び柱間の数値に疑問点が感ぜられるため、6棟のみについて記述した。

遺物の概要

出土遺物としては、土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦器・青磁等がある。

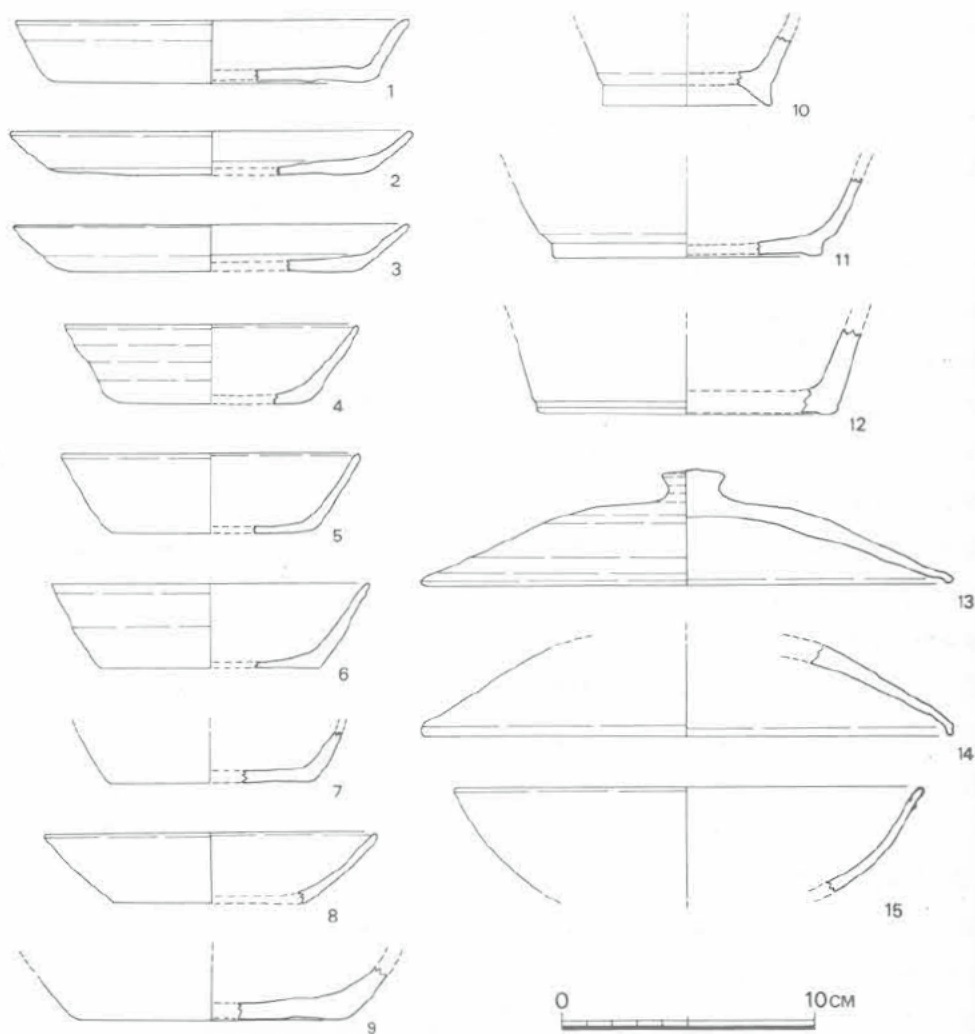
土師器 (第38図1～14・第39図1～6)

皿

第38図1～3は土師皿である。口径約16cm、高さ1.7 cm～2.6 cmを測る。底部は平底であり1・3にはへら切り痕が認められる。色調は赤褐色ないし黄褐色を呈し、胎土は良選されているが、焼成はやや甘い。1はピット12より出土した。

杯身 (第38図4～10)

4～8は口径11.8cm～12.8cm、高さ2.8 cm～3.4 cmを測る杯身の一群である。4～7は底部から口縁部に向け直線的に立ち上がっており、8は他に比してやや立ち上がりの角度がにぶい。底部は平底で、へら切り痕を有する。色調は赤褐色ないし黄褐色を呈し、胎土は良いが、焼成は甘い。9は杯身と思われる底部の破片である。4～8に比しやや厚手のつくりで底部は平底



第38図 出土遺物実測図① (1/4)

を呈する。色調は黄褐色。胎土は良選されているが、焼成は甘く軟質である。10は高台付の杯身である。色調は赤褐色で、胎土・焼成は9と同様である。

碗 (第38図11)

底部に高台状の削り出しを持つ碗の破片である。色調は黄褐色、胎土は良選されているが、焼成は甘い。

鉢 (第38図12)

12は鉢の底部の破片で、11と同じく低い削り出し高台を持っている。色調は赤褐色で、胎土は良選されているが、焼成は甘い。

蓋 (第38図13・14)

口唇部が下に屈曲した蓋である。13は円盤状のつまみを持ち、口唇部の屈曲が14に比して弱い。14は頂部を欠損しており、つまみの型は不明である。2点とも赤褐色で胎土は良選され、焼成は甘い。

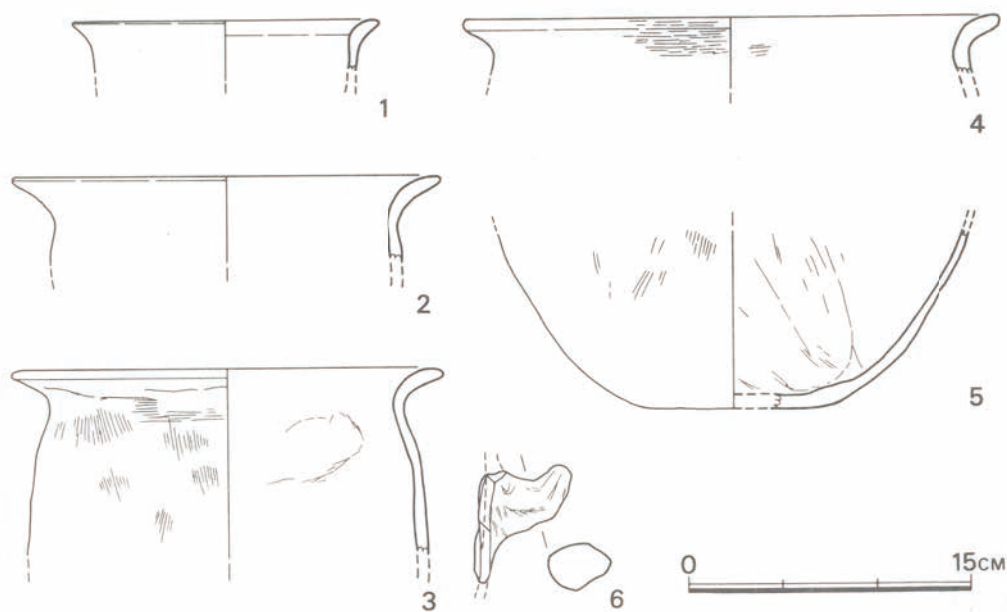
甕 (第39図 1～5)

1～4は口径16.4cm～28.4cmを測る甕の口縁部である。1は直線的に延びた胴部からやや外反しながら口縁部に移行し、内面にかすかな稜をつくる。2・3は頸部がややしまったのち口縁部へ外反しており、4は胴部から内湾したのち口縁部が外反する。3は胴部外面、4は内・外両面にハケ目による調整が施されている。色調は全体的に赤褐色を呈し、胎土は小石を含み、焼成は甘い。5は甕の底部である。丸底に近い平底を呈し、外面はハケ目による調整を施し、内面はへう削り痕を残している。色調は内面黄褐色を呈し、外面茶褐色を呈しススの付着が認められる。胎土には小石を含んでおり、焼成はやや甘い。これらの甕は口径が広く胴部の張りに乏しい点が特徴的である。

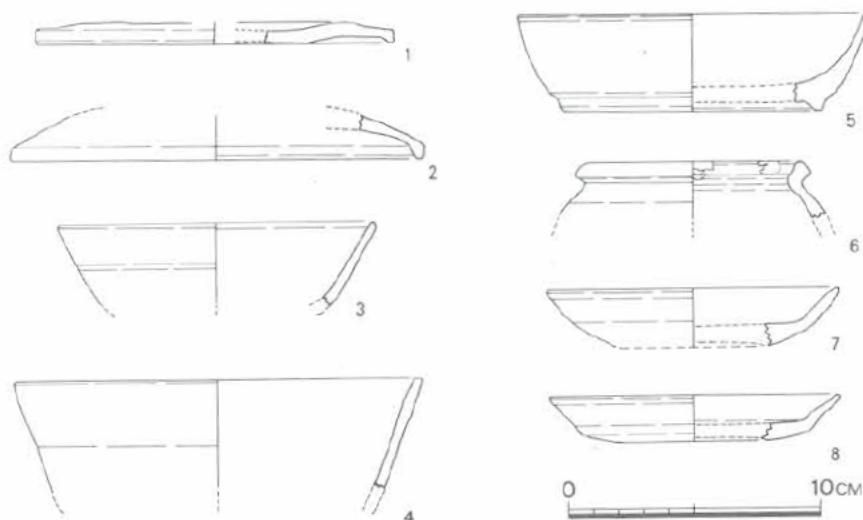
牛角状把手 (第39図 6)

甕ないし甕に付せられた牛角状の把手である。外面黒色、内面赤褐色を呈する。全本は手づねにより胴部との接合部には粘土を補強し、ハケ目が施されている。胎土は細砂を含み、焼成は比較的良好である。

須恵器 (第40図 1～5・第41図 1～3)



第39図 出土遺物実測図② (1/4)



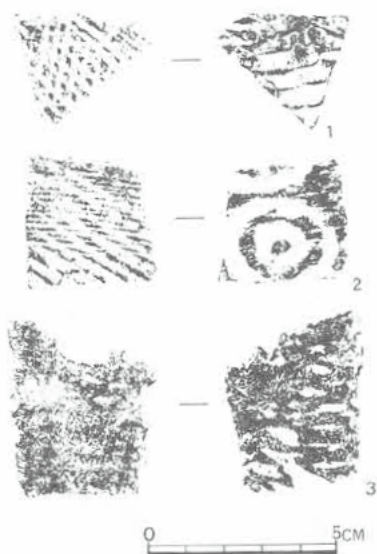
第40図 出土遺物実測図③ (1/4)

蓋 (第40図 1・2)

1・2は須恵器の蓋である。両者とも口唇部が下に屈曲している。頂部が欠損しているため、つまみの型等は不明である。1は暗灰色を呈し、胎土は小石を含むが、焼成は良好である。2は暗灰色を呈し、断面はやや赤味をおびている。胎土・焼成ともに良好である。2点ともピット29より出土した。

杯身 (第40図 3～5)

3は口径12.6cmを測る杯身である。底部は欠損し不明であるが、ロクロ整形により、胴部に1条の稜をもつ。ピット29の出土で、色調は内面赤褐色、外面灰褐色を呈する。胎土は良選されているが、焼成はやや甘い。4は口径16.2cmを測る。底部は3と同様に欠損している。器壁内外面とも横ナデがなされている。色調



第41図 出土遺物拓影 (1/2)

は灰色を呈し、胎土及び焼成は良好である。5は高台付の杯である。器高6.9cm、口径14cmを測る。高台部直上に1段の稜をもち、内湾気味のカーブで口唇に至る点が特徴的である。色調は暗灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好で、ピット4から出土した。

甕 (第41図 1～3)

1は外面に斜格子状の叩きが見られ、内面には横走する叩きがある。2の外面はロクロ目に調整されており、その下に叩きが残る。内面の叩きは同心円状をなす。3の外面は無文で

内面に叩き目がある。3点とも甕の胴部の破片と思われるが、本地点での出土は極少量であった。

緑釉陶器

ピット9より緑釉陶器片が出土した。細片であるため図示しなかったが、杯ないし碗の胴部と思われる。うすい黄緑色の釉を内外両面にかけているが、外面は釉が胎土になじまず剥離しやすい。胎土は灰白色で良選されており、焼成は甘く軟質である。

瓦器（第38図15）

瓦器碗の破片である。色調は灰白色で、胎土には砂粒を含む。焼成は甘く軟質である。瓦器碗としては通有の形で、青磁に伴う遺物である。

陶磁器（第40図6～8）

青釉陶器（第40図6）

小型の壺の口縁部である。復原口径8.4cmを測る。断面三角形の口縁内面及び口唇部に目痕がみられ、窯内に伏せて焼造されたものかと思われる。暗灰緑色の釉薬を内外面にうすくかけている。胎土は暗灰色で焼成は良好である。越州窯系の舶載品と考えられる。

青磁（第40図7・8）

7は龍泉窯系の青磁皿である。底部は欠損しているため不明であるが、見込に沈線1条をめぐらしている。見込にはへう描き文様が認められるが、細片のため明らかでない。暗い灰褐色の釉を全面にかけており、貫入がみられる。胎土は灰白色、焼成は緊緻である。8は珠光青磁の皿と思われる。7に比して薄手で、つくりが雑である。底部を欠くため施文は認められない。釉薬は緑灰色の釉を底部付近を除いてうすくかけている。胎土は白灰色を呈し、焼成は良好である。

小 結

1. 遺構の年代

本地点では、包含層が除去されており、遺物の出土量も少なかったが、遺物からみた遺構の年代は、奈良時代後期が中心と考えられる。時期的に降る遺物として、青磁・瓦器の出土を見たが、量的にはごく少量である。

本地点においては、4棟の掘立柱建物址を検出した。これらは、柱穴内の出土遺物により、奈良時代に属する建物址とされるが、方向・柱穴の重複からみて2～3時期に別けられよう。方向性からいえば2時期が想定される。その1はS B10・S B12・S B15にみられる南北線がほぼ磁北方向の向きをもつもので、その2はS B14の如く南北線が東に約40°振れた向きをもつ建物址である。これらの建物址の先後関係は、S B14・S B15についていえば、ピット24、ピット27の切り合いからS B14がS B15に先行すると思われる。推定し得た建物址以外にも多数の柱穴を検出しており、ピット30、ピット31の様に柱穴中から中世遺物を出土したものも

あったが、建物址としてまとまりをもたない。なおピット9より平安時代と思われる緑釉陶器片の出土を見たが、この時期に比定される遺物（内黒土師器・黒色土器）は、1～2点細片が出土したのみで、建物址は不明瞭である。

土壇に関しては、柱穴群が土壇を切っている状態が多数みられ、建物に先行するものと思われるが、土壇内から土師器片の出土を見ており、歴史時代に属するものであることは明らかである。

2. 遺構の性格

本地点では、歴史時代の堅穴は検出できず、すべて掘立柱建物址であった。これら6棟の建物址のうち2棟は発掘区域外で、その規模を確認することができなかったが、すべて1間×2間の小規模な建物である。性格として倉庫或いは小屋と考えることが可能であろう。

土壇については、はっきりした性格をつかむことはできなかった。しかし、SK11・SK12については、平面図上から見ると壇底に長方形の掘込みがあり、土壇墓を思わせる。

出土遺物の上では、土師器がそのほとんどを占め、須恵器は少量である。もっとも土師器の中には東遺跡・御蔵園第2次調査出土の例のごとき須恵器の技法によりながら、土師質に焼造されたものを含むが、それにしても須恵器の量が少ない。これは御蔵園第2次調査出土の遺物と時期的にも、質的にも同様であって、本地点が、第2次調査につらなる国府城内集落の一部であることを物語っている。第2次調査では、出土土師器の内にへう書きの文字を有するものがあったが、本地点では、緑釉陶器片が出土し、文化的レベルの高さをしのばせるものがある。緑釉陶器は、最近大宰府郭内の調査等によって、北部九州における出土例も増加しているが、やはり、国衙・郡衙・国分寺等、律令の支配機構に関連した遺跡から出土するという性格は否みがない。参考までに筑後地方における緑釉陶器の出土例を示せば第2表のとおりである。

本地点の調査は、小範囲ながら古代都市としての国府城内集落の様相をうかがい得たことに意義を有するものである。（古賀・近沢）

No.	出 土 地	器 形	備 考	文献
1	山門郡瀬高町大江長田	皿	表 採	1
2	久留米市合川町字東	不明(高台部)	昭和49年調査	2
3	〃 字北	杯	昭和49年調査	2
4	〃 〃	不 明	昭和50年調査	2
5	〃 字三丁野	壺	表 採	
6	〃 字御蔵園	不 明	昭和51年調査	
7	〃 字脇田	碗	昭和51年調査	

第2表 筑後地方緑釉陶器出土地名表

文献1. 小山富士夫「日本陶磁総覧」

2. 久留米市文化財調査報告書第12集「筑後国府跡(I)」

第3 おわりに

合川小学校々地内に所在する御蔵園遺跡については、昭和35年3月同校々庭に砂場が設けられた際、若干の土師器片が出土したので、与崎淳氏とともに紹介したことがある。これは極めて断片的な資料であったが、大別して古式土師器と歴史時代土師器との2期のものが見られ、古式土師器が学界で論議されていた頃でもあり、大いに興味を覚えたものである。それから十数年を経て、奇しくもこの遺跡の一角を発掘調査する機会に恵まれたわけであるが、本報告に収録したとおり、弥生終末期から古式土師器にかけてと、奈良後期を中心とする歴史時代の遺構が、重複して検出されたのである。

本遺跡出土の弥生終末期から古式土師器にかけての資料は、同じ国府推定地内の古宮遺跡出土の土器群とともに、この地方における土師器始源の問題を考える上で重要な資料を提供するものである。^(註2)一方、奈良期の遺物では、第2次調査において検出された土壇SK3出土の土器群が、筆者が昭和49年度に調査した東遺跡出土のそれと同じく、須恵器的手法により製作され、土師質に焼造されたものであることが注目される。^(註3)この種の土器が土師器であるのか、それとも須恵器とすべきか、その帰属については今後の検討を要するが、型的的にも新知見を含むものである。

従来、本遺跡は「御蔵園」の地名により、国倉の遺跡である可能性が指摘されていた。国・郡衙の倉庫が一地域に密集していたことは、延暦10年(791)2月12日付の太政官符に、諸国の倉庫が「犬牙相接」の状態であるとみえることから察せられる。従って「御蔵園」は、大宰府における「蔵司」と同様、倉院の所在地ではないかと考えられたのである。^(註4)そのことを指摘したのは、やはり矢野一貞が最初であって、『筑後国郡志』に、^(註5)

メクラゾノは御蔵園にて、メミは殊に親しく通へる語なれば、土俗いつとなく唱へ訛りしなるべし。こゝは民部式に見えたる本州の正税公廩各廿万束を始め、国分寺新修理、観世音寺新府公廩修理、官舎祈の雑稲数万束を納めし倉庫、又兵庫等の遺趾と
所思はるゝ。

と述べている。ここでは「メクラゾノ」と記されているが、『明治15年字小名調』には正しく『御蔵園』と見えている。^(註6)その推定府域内に占める位置も国衙跡の東北400m余の段丘縁辺であって、「几倉、皆於高燥処、置之……去倉五十丈内不得置館舎」という『倉庫令』の規定に矛盾しない。

ここで試みに各国府推定地における蔵の遺称と思われるものを拾って見ると、次の如くである。^(註7)

1. 遠江

倉小路

2. 上 総	蔵 の 上
3. 安 房	蔵 敷
4. 下 野	蔵 屋 敷 ・ 蔵 前 ・ 宝 蔵 地
5. 伯 耆	今 蔵
6. 出 雲	蔵 屋 敷 ・ 蔵 後
7. 周 防	蔵 添
8. 筑 後	御 蔵 園
9. 豊 前	喜 蔵
10. 薩 摩	兵 庫 原

こうしてみると、国府関係の地名として、蔵に因むものは比較的多いことが知られよう。しかし、府の倉院に関しては、現在のところ発掘調査によって地名と遺構が一致した例を聞いていない。本遺跡の場合も、4次にわたる調査の結果、倉院の遺構はついに検出されなかった。たとえ「御蔵園」の地名が、国府の倉院に因むものであったにせよ、地名は移動することがあり得るし、必ずしもそこに関連の遺構が存するとは限るまい。結局、歴史地理学上の地名による考証は、考古学においてはあくまでも参考に留まるものであって、国府の形態、規模・構造等は、やはり息の永い発掘調査によって、実証的に解明してゆかねばならないと考える。

(古賀)

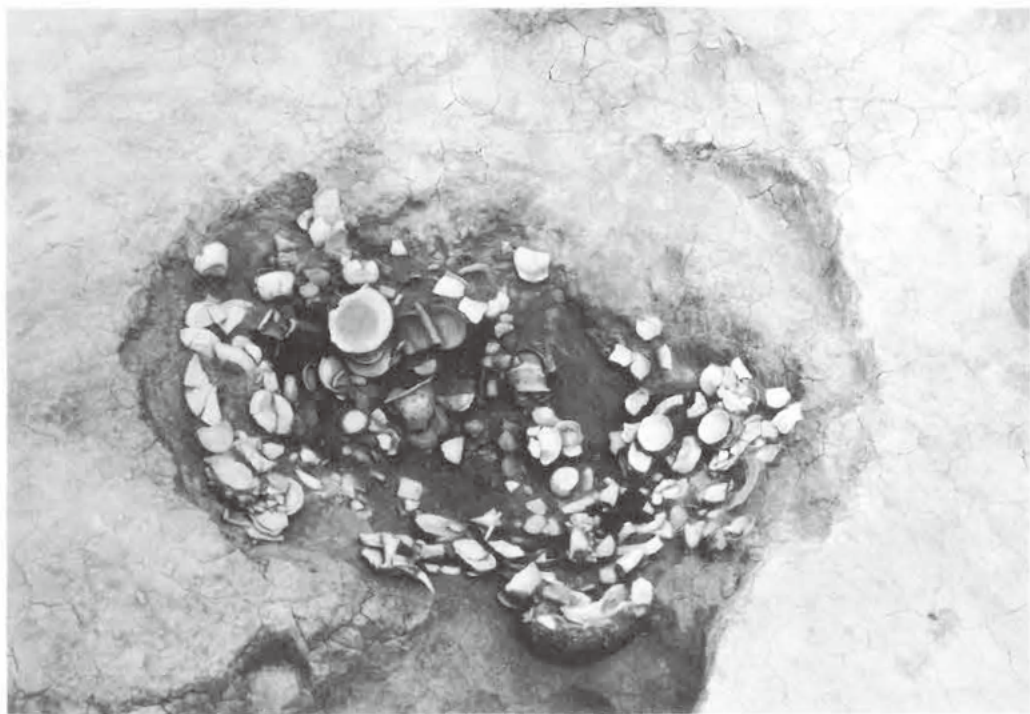
- 注** 1. 与崎淳、古賀寿『久留米市御蔵園出土の土師器』九州考古学15(昭和37年)
2. 古賀寿『久留米市古宮出土の弥生式土器』国大考古学会々報63・64(昭和37年)
- 波多野皖三『古宮・阿弥陀遺跡』筑紫史論第3輯(昭和50年)
3. 『筑後国府跡Ⅰ』久留米市文化財調査報告書第12集(昭和51年)
4. 『類聚三代格』巻12
5. 矢野一貞『筑後国郡志(国府上)』篠山神社文庫蔵(文久2年)
6. 『福岡県史資料』第7輯(昭和12年)
7. 藤岡謙二郎『国府』日本歴史叢書25(昭和44年)

圖

版



1. 第2次調査区全景（東より）



2. 土壇 S K 3 遺物出土状態



1



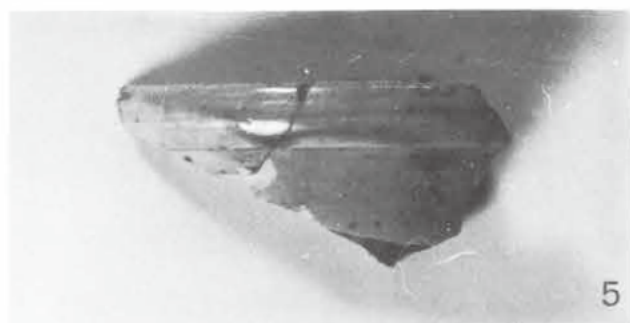
3



2



4



5



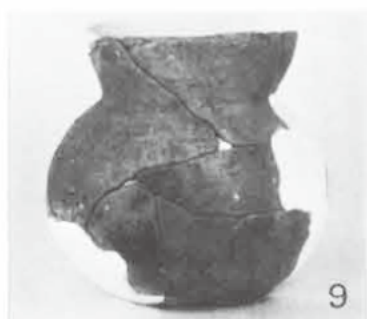
6



7



8



9

溝SD1出土遺物(1~6第1層、7~9 第Ⅲ層)



1



4



2



5



3

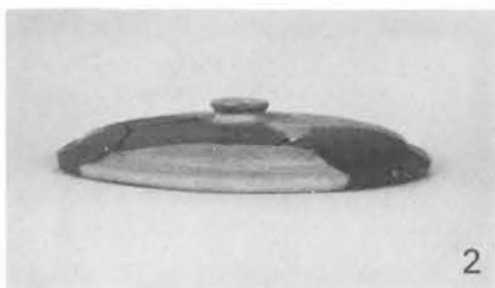
竪穴式住居跡出土遺物 (1~2 SB2, 3~4 SB7, 5 SB8)



1



6



2



7



3



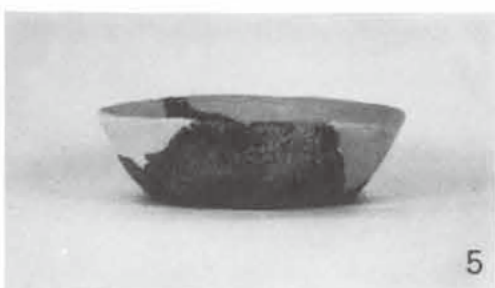
8



4



9



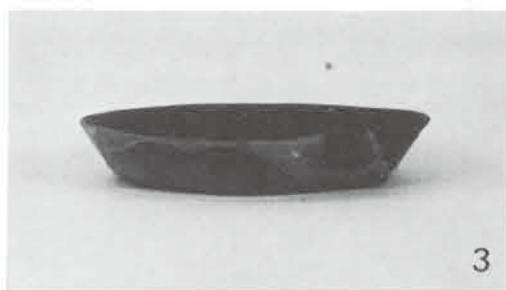
5



10









1



2



3



4

1. 土壇出土遺物 (1・2 SK3, 3 SK4, 4 SK7)



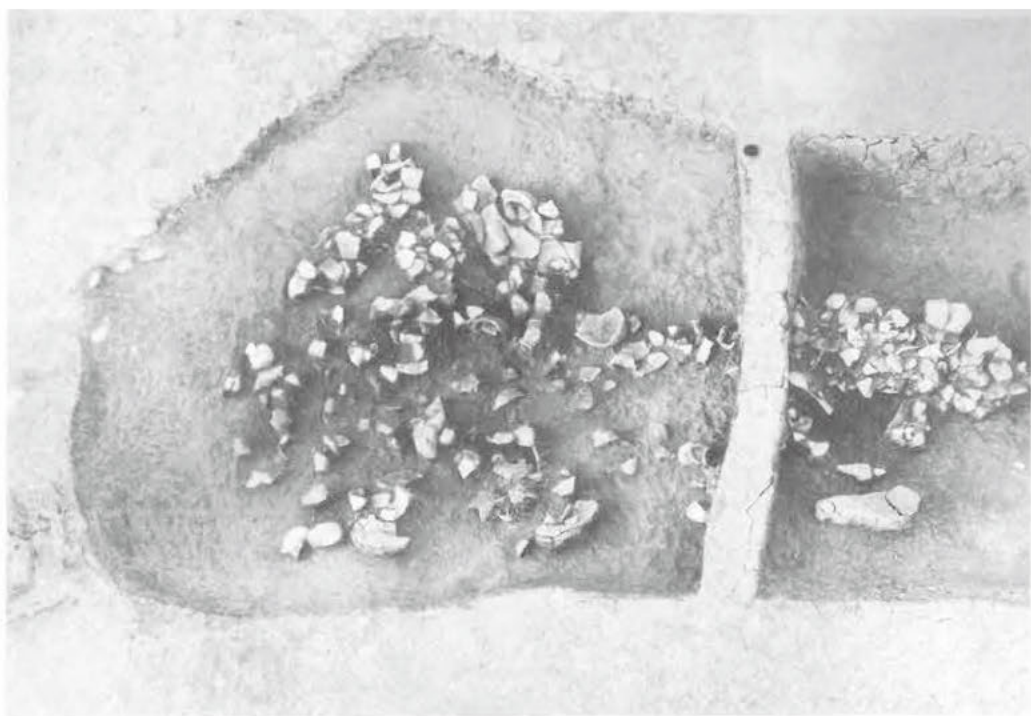
2. 第3次調査区全景 (北より)



1. 第3次調査区全景（東より）



2. 溝状遺構SD1（西より）



1. 溝状遺構SD4 (西より)



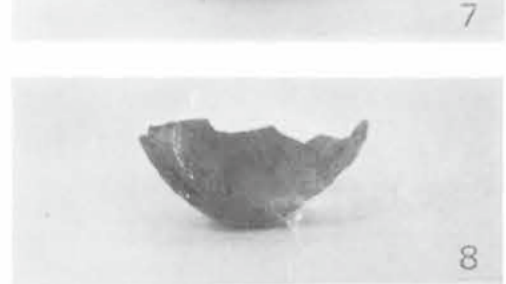
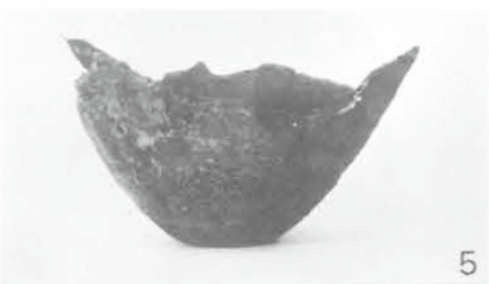
2. 溝状遺構SD4 遺物出土状態



溝SD1出土遺物①（須恵器）



溝SD1出土遺物② (1~5 土師器, 6 須恵器)





1



4



2



5



3



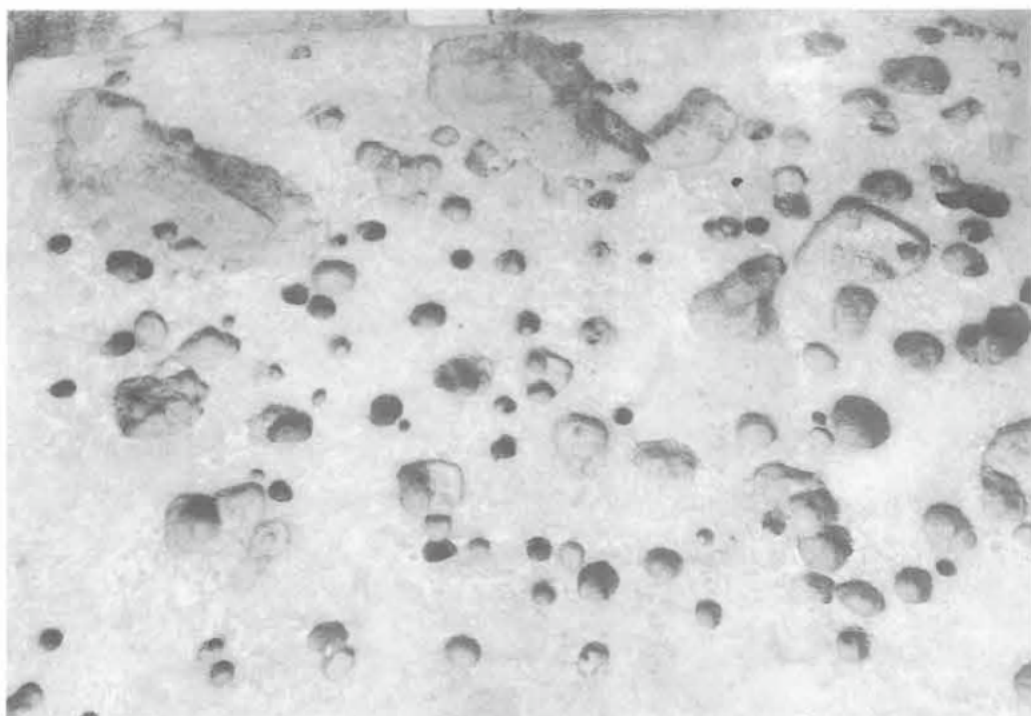
6



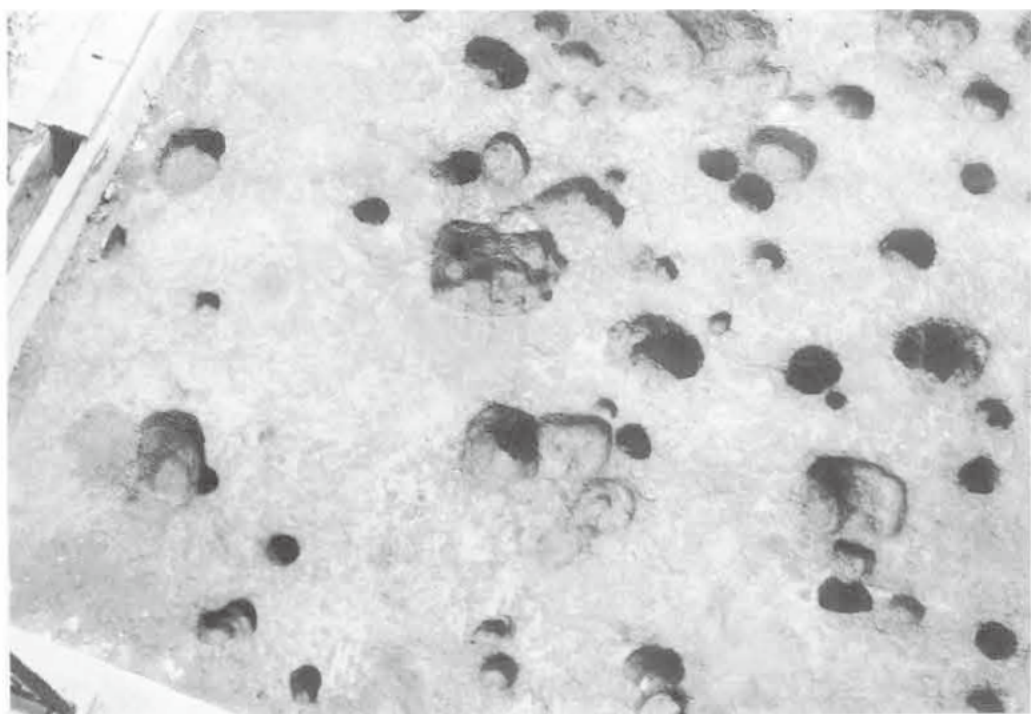
1. 第4次調査区全景（南より）



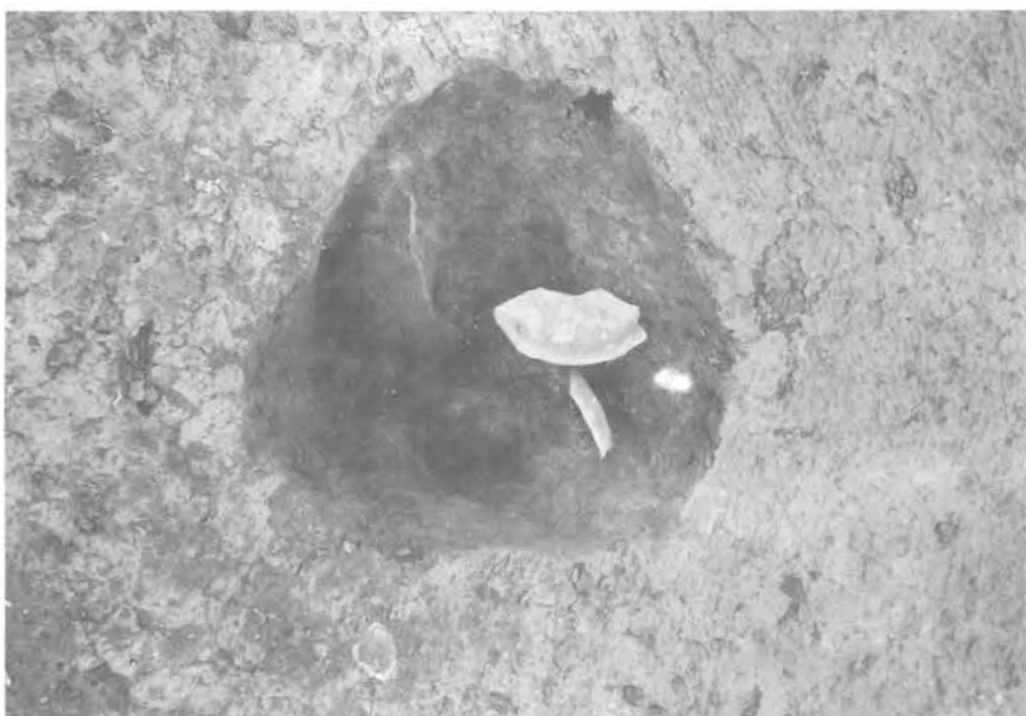
2. 第4次調査区全景（北より）



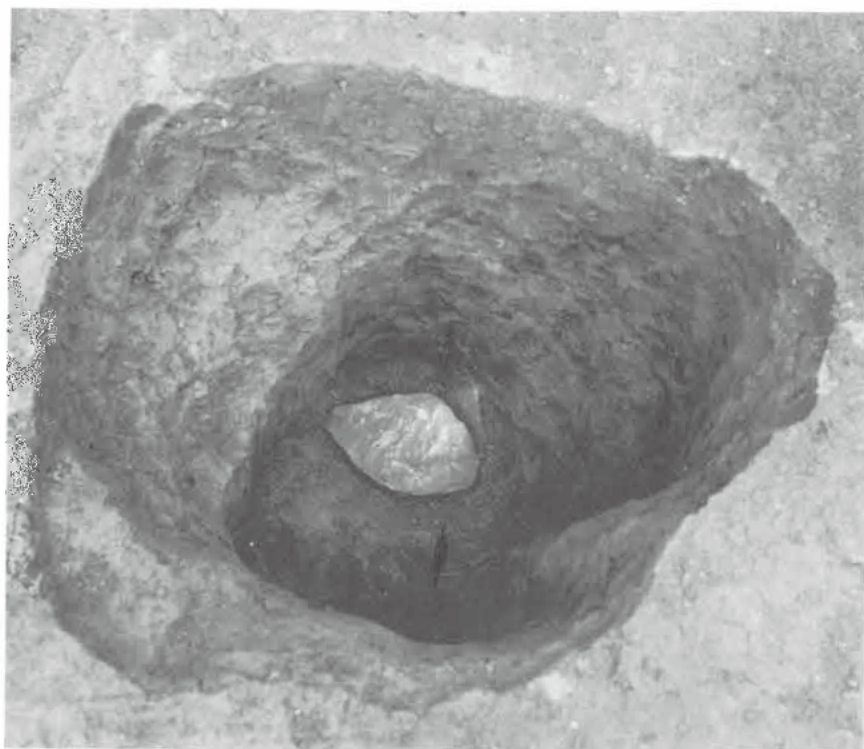
1. 第4次調査区全景（西より）



2. 西北隅柱穴群



遺構中の遺物出土状態



1. 根石を有する柱穴



1



2



3



4

2. 出土遺物 (1・3・4 土師器, 2 須恵器)

久留米市文化財調査報告書 第13集

昭和52年3月31日

発行 久留米市教育委員会

久留米市城南町15-3

印刷 (有) 猪飼プリント

久留米市東和町6-18